

# 歌行燈

泉鏡花

青空文庫



宮みや重やしげ大根のふとしく立てし宮柱は、ふろふきの熱田の神のみ  
 そなわす、七里のわたし浪なみゆたかにして、来往の渡船難なく桑名  
 につきたる悦よろこびのあまり……

と口くちぐさ誦よみむように独ひとりごと言ことの、膝ひざ栗くり毛げ五編の上の読初め、霜

月十日あまりの初夜。中なか空ぞらは冴さえ切きつて、星みずが水垢ずり離取りそくな

月つき明あかりに、踏切の栈橋を渡る影高く、灯ともちらちらと目の下に、

遠おちこち近こたちの樹立の骨ばかりなのを視ながめながら、桑名の停ステ車エ場シ場ンへ下

りた旅客がある。

月の影には相応ふさわしい、真黒まっくろな外套がいとうの、瘦やせた身体からだにちと広  
 過ぎるを緩く着て、焦茶色の中折帽、真新しいはさて可いいが、馴な  
 れない天窗あたまに山を立てて、鐐つばをしつくりと耳へ被かぶさるばかり深く  
 嵌はめた、あまつさえ、風に取りられまいための留紐とめひもを、ぶらりと  
 皺しなびた頬へ下げた工合ぐあいが、時世ときよなれば、道中、笠も載のせられず、  
 と断念あきらめた風に見える。年配六十二三の、氣ばかり若い弥次郎兵  
 衛え。

さまで重荷ではないそうで、唐草模様びろうどの天鵝絨かばんの革靴かばんに信玄袋  
 を引搦ひきからめて、こいつを片手。片手に蝙蝠傘こうもりがさを支つきながら、  
 「さて……悦びのあまり名物の焼やきはまぐり 蛤かきに酒汲くみかわして、……  
 と本文ほんもんにある処ところさ、旅籠屋はたごやへ着ちやくの前に、停車場前の茶店か何か

で、一本傾けて参ろうかな。（どうだ、喜多八。<sup>きだはち</sup>）と行きたいが、  
 其許<sup>そのもと</sup>は年上で、ちとそりが合わぬ。だがね、家元の弥次郎兵衛  
 どの事も、伊勢路では、これ、同伴<sup>つれ</sup>の喜多八にはぐれて、一人旅  
 のとぼとぼと、棚からぶら下った宿屋を尋ねめぐんで、泣きそう  
 になったとあるです。ところで其許は、道中松並木で出来た道づ  
 れの格だ。その道づれと、何ん<sup>な</sup>と一口遣<sup>や</sup>ろうではないか、ええ、  
 捻<sup>ねじ</sup>平<sup>へい</sup>さん。」

「また、言うわ。」

と苦い顔を渋くした、同伴<sup>つれ</sup>の老人は、まだ、その上を四つ五つ  
 で、やがて七十<sup>ななそじ</sup>なるべし。臘虎皮<sup>らつこ</sup>の鍔<sup>つば</sup>なし古帽子を、白<sup>まゆ</sup>い眉<sup>まゆ</sup>  
 尖<sup>き</sup>深々と被<sup>かぶ</sup>つて、鼠<sup>らしや</sup>の羅紗<sup>らしゃ</sup>の道<sup>みち</sup>行<sup>ゆき</sup>着<sup>き</sup>た、股<sup>もも</sup>引<sup>ひき</sup>を太く白足袋

の雪駄穿せつたばき。色褪あせた鬱金うこんの風呂敷、真中まんなかを紐ゆわで結ゆわえた包を、  
西行背負さいぎようじよいに胸で結んで、これも信玄袋を手に一つ。片手に杖つえ  
は支ついたけれども、足腰はしやんとした、人柄じんがらの可いいお爺様じいさま。  
「その捻平は止よしにさっしやい、人聞じんききが悪あうてならん。道づれ  
は可よけれども、道中松並木で出来たと言うで、何とやら、その、  
私わしが護摩ごまの灰あしでもあるように聞えるじや。」と杖を一つとんと  
支くと、後あとの雁がんが前さきになつて、改札口かいはくぐちを早々さつさと出る。  
わざと一足後うしろへ開いて、隠居いんきょが意見いけんに急いそぐような、連つれの後姿ごしを  
じろりと見ながら、

「それ、そこがそれ捻平さね。松並木で出来たと云つて、何もご  
まのはいには限るまい。もつとも若い内は遣つたかも知れんてな。

ははは、」

人も無げに笑う手から、引手ひつたく繰るように切符を取られて、はつと馱夫の顔を見て、きよとんと生真きまじめ面目。

成程、この小父者おじごが改札口を出た殿しんがりで、何をふらふら道草したか、汽車はもう遠くの方で、名物焼蛤の白い煙を、夢のように月下に吐いて、真まっさお蒼な野路を光つて通る。……

「やがてここを立出たちいで辿たどり行くほどに、旅人の唄うたを聞けば、」  
と小父者、出た処で、けろりとしてまた口くちずさ誦ずんで、

「捻平さん、可いい文句だ、これさ。……

時雨しぐれはまぐり蛤みやげにさんせ

宮みやのおかめが、……ヤレコリヤ、よオしよし。」

「旦那、お供はどうで、」

と停車場前の夜の隈に、四五台朦朧と寂しく並んだ車の中

から、車夫が一人、腕組みをして、のっそり出る。

これを聞くと弥次郎兵衛、口を捻じて片頬笑み、

「有難え、凶星という処へ出て来たぜ。が、同じ事を、これ、

(旦那衆戻り馬乗らんせんか、)となぜ言わぬ。」

「へい、」と言ったが、車夫は変哲もない顔色で、そのまま

棒立。



小父者おじごは外套おうぎの袖そでをふらふらと、酔よったような風ふう附つきで、

「遣やれよ、さあ、（戻馬もどま乗まらんせんか、）と、後ご生しょうだから一つ  
気取きつてくれ。」

「へい、（戻馬もどま乗まらんせんか、）と言うでございますかね、戻馬もどま乗ま  
らんせんか。」

と早口はやぐちで車夫くるまぶは実体じつてい。

「はははは、法性ほうじやう寺じ入道にゆうどう前さきの関白かんぱく太政大臣だいじやうだいじんと言いつ  
たら腹はらを立ちやつた、法性ほうじやう寺じ入道にゆうどう前さきの関白かんぱく太政大臣だいじやうだいじん様さまと来きてい  
る。」とまたアハハと笑わらう。

「さあ、もし召めいして下さい。」

と話は極きまった筈はずにして、委細わいさい構かまわず、車夫くるまぶは取と着ついて梶かじ棒ぼうを

差向ける。

小父者、目を据えてわざと見て、

「ヤレコリヤ車なんぞ、よオしよし。」

「いや、よしではない。」

とそこに一人つくねんと、添竹そえだけに、その枯菊かれぎくの縋すがった、霜

の翁おきなは、旅のあわれを、月空に知った姿で、

「早く車を雇わつしやれ。手荷物はあり、勝手知れぬ町の中を、

何を当あてにぶらつこうで。」と口叱くちごごと言ことで半ばつぶや呟つぶやく。

「いや、まず一つ、（よヲしよし、）と切出さんと、本文に合わ

ぬてき。処へ喜多八が口を出して、（しようろく四銭しもんで乗るべ

か。）馬士うまかたが、（そんなら、ようせよせ。）と言いやす、馬が

ヒインヒインと嘶いばう。」

「若いもの、その人に構うまい。車を早く。川口の湊屋みなとやと云う旅籠屋はたごやへ行くのじゃ。」

「ええ、二台でござりますね。」

「何んでも構わぬ、私は急ぐに……。」と後うしろむ向きに掴つかまつて、乗った雪駄つまだを爪立てながら、蹴けこ込みへ入れた革鞆またを跨またぎ、首に掛けた風呂敷包みを外はずしもしないで揺ゆつておく。

「一蓮いちれん託たく生しょう、死なば諸共、捻平待ちやれ。」と、くすくす笑つて、小父者も車にしゃんと乗る。……

「湊屋だえ、」

「おいよ。」

で、二台、月に提灯かんばんの灯黄色あかりに、広場ひろつばの端へ駈込かけこむと……  
 石高路いしたかみちをがたがたしながら、板塀いたべいの小路、土塀ちべいの辻、径路ちかみちを  
 縫うと見えて、寂しい処幾曲り。やがて二階屋が建続き、町幅が  
 糸のよう、月の光を廂ひさしで覆おおうて、両側の暗い軒に、掛行燈かけあんどんが疎  
 に白く、枯柳に星が乱れて、壁の蒼いのが処々。長い通りの突当  
 りには、火の見の階子はしごが、遠山とやまの霧を破つて、半鐘はんしようの形活  
 けるがごとし。……火の用心さつさりやしよう、金棒かなぼうの音に夜  
 更けの景色。霜枯時の事ながら、月は格子にあるものを、桑名の  
 妓達こは宵寝と見える、寂しい新地くるわへ差掛さしかかった。  
 輻やぼねの下に流るる道は、細き水銀の川のごとく、柱の黒い家の状さま、  
 あたかも獺かわうそが祭礼まつりをして、白張しらはりの地口行燈じぐちあんどんを掛連ねた、鉄橋

を渡るようである。

爺様の乗った前の車が、はたと留<sup>とま</sup>った。

あれ聞<sup>き</sup>け……寂<sup>ひっそり</sup>寞<sup>ひっそり</sup>とした一<sup>ひとすじ</sup>条<sup>くるわ</sup>廓<sup>わ</sup>の、棟<sup>むね</sup>瓦<sup>が</sup>にも響<sup>な</sup>き転<sup>てん</sup>

げる、轍<sup>わだち</sup>の音も留<sup>とま</sup>まるばかり、灘<sup>なだ</sup>の浪を川に寄せて、千里の果<sup>は</sup>も

同じ水に、筑前の沖の月影を、白<sup>しろ</sup>銀<sup>がね</sup>の糸で手繰<sup>と</sup>ったように、星

に晃<sup>きら</sup>めく唄<sup>うた</sup>の声。

博<sup>は</sup>多<sup>かた</sup>帯<sup>おび</sup>しめ、筑<sup>ちく</sup>前<sup>ぜん</sup>絞<sup>しぼり</sup>、

田舎の人とは思われぬ、

歩<sup>あ</sup>行<sup>る</sup>く姿<sup>すがた</sup>が、柳<sup>やなぎ</sup>町<sup>まち</sup>、

と博<sup>は</sup>多<sup>かた</sup>節<sup>ふし</sup>を流<sup>なが</sup>している。……つい目の前<sup>まへ</sup>の軒<sup>のき</sup>陰<sup>かげ</sup>に。……白<sup>しろ</sup>地<sup>ぢ</sup>の

手<sup>て</sup>拭<sup>ぬぐ</sup>い、頬<sup>ほ</sup>被<sup>か</sup>むり、すらりと瘦<sup>やせ</sup>ぎすな男<sup>おとこ</sup>の姿<sup>すがた</sup>の、軒<sup>のき</sup>のその、うど

んと紅べにで書いた看板の前に、横顔ながら俯うつむ向いて、ただ影法師の  
ようにたたずイむのがあつた。

捻平はフト車の上から、頸うなじの風呂敷包のまま振向いて、何か背う  
後しろへ声を掛けた。……と同時に弥次郎兵衛の車も、ちようどその  
唄う声を、町の中で引ひっぱ挟んで、がつきと留とどまつた。が、話の意  
味は通ぜずに、そのまま捻平のがまた曳ひきだ出す……後あとの車も続いて  
駈かけ出す。と二台がちよつと摺すれ摺すれになつて、すぐ旧もとの通り前あ  
後とさきに、流るるような月夜の車。

お月様がちよいと出て松の影、

アラ、ドッコイシヨ、

と沖の浪の月の中へ、颯と、撥を投げたように、霜を切つて、  
唄い棄てた。……饅頭屋の門に博多節を弾いたのは、転進をや  
や縦に、三味線の手を緩めると、撥を逆手に、その柄で弾くよう  
にして、仄のりと、薄赤い、其屋の板障子をすらりと開けた。

「ご免なさいよ。」

頬被りの中の清しい目が、釜から吹出す湯気の裏へすつきりと、  
出たのを一目、驚いた顔をしたのは、帳場の端に土間を跨いで、  
腰掛けながら、うっかり聞惚れていた亭主で、紺の筒袖にめくら  
縞の前垂かけ、草色の股引で、尻からげの形、によいと立つ

て、

「出ないぜえ。」

は、ずるいな。……案ずるに我が家の門かどづけ附つけを聞徳ききどくに、いぎ、その段だになつた処ところで、件くだんの（出ないぜ。）を極きめてこまそ心積こころづりを、唐突だしぬけに頬被つっこを突つ込まれて、大分狼狽うろたえたものらしい。もつとも居合いあわした客きやくはなかつた。

門附かどづけは、澄あまして、背後うしろじめに戸かどを閉たてながら、三味線さんまいせんを斜はすにずつと入いつて、

「あい、親方おやぢは出いずとも可いいのさ。私わたしの方かたで入いるのだから。……ねえ、女房おかみさん、そんなものじゃありませんかね。」

とちと笑聲わらこゑが交まじつて聞きえた。



女房は、これも現下の博多節に、うつかり気を取られて、釜前の湯気に朦として立っていた。……浅葱の襷、白い腕を、部厚な釜の蓋にちよつと載せたが、丸鬚をがつくりさした、色の白い、歯を染めた中年増。この途端に颯と瞼を赤うしたが、竈の前を横ツちよに、かたかたと下駄の音で、亭主の膝を斜交いに、帳場の銭箱へがつちりと手を入れる。

「ああ、御心配には及びません。」

と門附は物優しく、

「串戲だ、強請んじやありません。こつちが客だよ、客なんですよ。」

細長い土間の一方は、薄汚れた縦に六畳ばかりの市松畳、そこ

へ上れば坐れるのを、釜に近い、床しょうぎい几の上に、卜足を伸ばして、

「どうもね、寒くって堪たまらないから、一杯御馳走ごちそうになろうと思つて。ええ、親方、決してその御迷惑を掛けるもんじやありません。」

で、優柔おとなしく頬被りを取つた顔を、と見ると迷惑どころかい、目鼻立ちのきりりとした、細ほそおもて面の、瞼まぶたやつれに窶あには見えるけれども、目の清らかな、眉の濃い、二十八九のひとがら人品あにいな兄哥である。

「へへへへ、いや、どうもな、」

と亭主は前へ出て、揉手もみでをしながら、

「しかし、このお天気続きで、まず結構でござりやすよ。」と何

もない、煤すすけた天井を仰ぎ仰ぎ、帳場の上の神棚へ目を外そらす。

「お師匠さん、」

女房前垂をちよつと撫なでて、

「お銚子ちょうしでございますかい。」と莞爾にっこりする。

門附は手拭の上へ撥ばちを置いて、腰へ三味線を小取廻ことりまわし、内端うちわに片膝を上げながら、床几の上に素足の胡坐あぐら。

ト裾すそを一つ搔かい込んで、

「早速一合、酒は良いのを。」

「ええ、もう飛切りのをおつけ申しますよ。」と女房は土間を横よ歩ある行き。左側の畳に据えた火鉢の中を、邪険に火箸ひばしで搔かい掘ほじつて、赫かつと赤くなつた処を、床几の門附へずいと寄せ、

「さあ、まあ、お当りなさりました。」

「難ありがて有え、」

と鉄拐てつかに褻つまへ引挟ひっばさんで、ほうと呼吸いきを一つ長く吐ついた。

「世の中にや、こんな炭火があると思うと、里心が付いてなお寒い。堪たまらねえ。女房おかみさん、銚子をどうかね、ヤケという熱爛あつかんにしておくんなさい。ちつと飲んで、うんと酔おうという、卑劣な癖が付いてるんだ、お察しものですぜ、ええ、親方。」

「へへへ、お方かた、それ極熱ごくあつじゃ。」

女房は染めた前歯を美しく、

「あいあい。」

## 四

「時に何かね、今此家の前を車が二台、旅の人を乗せて駈抜けたつけ、この町を、……」

と干した猪口で門を指して、

「二三町行つた処で、左側の、屋根の大きそうな家へ着けたのが、蒼く月明りに見えたがね、……あすこは何かい、旅籠屋ですか。」

「湊屋でございまさ、なあ、」と女房が、釜の前から亭主を見向く。

「湊屋、湊屋、湊屋。この土地じゃ、まああすこ一軒でござりますよ。古い家じゃが名代で。前には大きな女郎屋じゃつたのが、

旅籠屋になつたがな、部屋々々も昔風そのままな家じやに、奥座敷の欄干の外が、海と一所の、大い掛斐の川口じや。白帆の船も通りますわ。鱸は勿ねる、鰯は飛ぶ。とんと類のない趣のある家じや。ところが、時々崖裏の石垣から、獺が這込んで、板廊下かわやつつや厠に点いた燈を消して、悪戯をするげに言います。が、別に可恐い化方はしませぬで。こんな月の良い晩には、庭で鉢叩きをして見せる。……時雨れた夜さりは、天保銭一つ使賃で、豆腐を買いに行くと言う。それも旅の衆の愛嬌じや言うて、豪い評判の好い旅籠屋ですがな、……お前様、この土地はまだ何も知りなさらんかい。

「あい、昨夜初めてこつちへ流込んで来たばかりさ。一向方角も

何も分らない。月夜も闇の烏さね。」

と俯向いて、一口。

「どれ延びない内、底を一つ温めよう、遣つたり！ ほつ、」  
 と言つて、目を擦つて面を背けた。

「利く、利く。……恐しい利く唐辛子だ。こう、親方の前だがね、  
 ついこないだもこの手を食つたよ、料簡が悪いのさ。何、上  
 方筋の唐辛子だ、鬼灯の皮が精々だろう。利くものか、と高を  
 括つて、お銭は要らない薬味なり、どしこと并へぶちまけて、松  
 坂で飛上つた。……また遣つたさ、色気は無えね、涙と涎が一  
 時だ。」と手の甲で引擦る。

女房が銚子のかわり目を、ト掌で爛を当つた。

「お師匠さん、あんたは東の方かたですなあ。」

「そうさ、生うまれは東だが、身しん上しやうは北山さね。」と言う時、徳利の底を振って、垂たらたら々と猪口ちよくへしたむ。

「で、お前様、湊屋へ泊んなさろうと言うのかな。」

それだ、と門口で断らりよう、と亭主はその段含ませたそんな気の可いい顔色かおつき。

「御串戯ごじやうだんもんですぜ、泊りは木賃きちんと極きまつていまさ。莫塵ござと笠かさ

草鞋わらじが留守居。壁の破れた処から、鼠が首を長くして、私の帰るのを待っている。四五日はこの桑名へ御厄介ごやくけいになろうと思う。：

：上旅籠じやうはたごの湊屋で泊めてくれそんな御人品ごにんぴんなら、御当家ごとうかへ、一夜の御無心ごむしん申したいね、どんなもんです、女房おかみさん。」



「こんなでよくば、泊めますわ。」

と身軽に銚子を運んで寄る。と亭主驚いた眉を動かし、

「滅相な。」と帳場を背負つて、立塞がる体に腰を掛けた。い

や、この時まで、紺の鯉こいぐち口に手首を縮めて、案山子のごとく立

ったりける。

「はははは、お言葉には及びません、饅飩屋さんで泊めるものは、

醬油おしたじの雨宿りか、鯉かつおぶし節かっおぶしの行者だろう。」

と呵々からからと一人で笑った。

「お師匠さん、一つお酌さしておくんなさいまし。」と女房は市松の畳の端から、薄く腰を掛込んで、土間を切つて、差向いに銚子を取った。

「飛んでもない事、お忙しいに。」

「いえな、内じや芸妓屋げいこやさんへ出前ばかりが主おもですから、ごらんの通りゆつくりじやえな。ほんにお師匠さん佳いいお声ですな。なあ、良人あんた。」と、横顔で亭主を流ながしめ晒しめ。

「さよじや。」

とばかりで、煙草たばこを、ぱっぱつ。

「なあ、今お聞かせやした、あの博多節を聞いたればな、……私や、ほんに、身に染みて、ぶるぶると震えました。」

五

「そう讚められちやお座が醒める、酔も醒めそう遣瀬がない。たかが大道芸人さ。」

と兄哥は照れた風で腕組みした。

「私がお世辞を言うものですか、真実ですえ。あの、その、なあ、悚然とするような、恍惚するような、緊めたような、投げたような、緩めたような、まあ、何んと言うて可かろうやら。海の中に柳があつたら、お月様の影の中へ、身を投げて死にたいような、……何んとも言ひようのない心持になつたのですえ。」

と、脊筋を曲つて、肩を入れる。

「お方、お方。」

と急込んで、訳もない事に不機嫌な御亭が呼ばれる。

「何じやいし。」と振向くと、……亭主いつの間にか、神棚の下もとに、斜しやと構かまえて、帳面ひつくを引繰ひくつて、苦にらく睨にらみ、

「升屋ますやが懸かけはまだ寄越よこさんかい。」

と算盤そろばんを、ぱちりぱちり。

「今時いまどうしたえ、三十日みそかでもありませんに。……お師匠しやうさん。」

「師匠しやうじやないわ、升屋ますやが懸かけじやい。」

「そないに急に気きになるなら、良人あんた、ちやと行いつて取とつて来きい。」

と下唇はねぢようしの芻調子はねぢようし。亭主ていしゆぎやふんと参まゐつた体ていで、

「二進にしんが一進いちしん、二進にしんが一進いちしん、二一にいち天作てんさくの五ご、五ご一いち三六七八さんろくしちはち

九く。」と、餛飩うどんの帳のびの伸縮のびちぢみは、加減さしひきだけで済すむものを、

醬油しょうじゆに水みづを割算段わりざんだん。

と釜の湯気の白けた処へ、星の凍てそうな按摩あんまの笛。月天心つきてんしん  
 の冬の町に、あたかもこれこがらし風を吹込む声す。

門附の兄哥あにいは、ふと瘦やせた肩を抱いて、

「ああ、霜に響く。」……と言った声が、物語を読むように、朗ほがらか  
 に冴さえて、且つ、鋭く聞えた。

「按摩が通る……女房おかみさん、」

「ええ、笛を吹いてですな。」

「畜生、怪けしからず身に染みる、堪たまらなく寒いものだ。」

と割膝かしこまに跪坐かしくまして、飲みさしの茶の冷えたのを、茶碗に傾け、  
 ざぶりと土間へ、

「一ツこいつへ注ついでおくんな、その方がお前さんも手数たずなが要ら

ない。」

「何んの、私はちつとも構うことないのですえ。」

「いや、御深切は難有ありがたいが、葉罐やかんの底へ消炭けしずみで、湧わくあとから醒さめる処へ、氷で咽喉のどを抉えぐられそうな、あのパイパイを聞かされちや、身体からだにひびつ裂たけがはいりそうだ。……持つて来な。」

と手を振るばかりに、一息にぐつと呷あおった。

「あれ、お見事。」

と目を睜みはって、

「まあな、だけれどな、無理酒おしいなえ。沢山たんと、あの、心配する方があるのですやろ。」

「お方、八百屋の勘定は。」

と亭主まばた瞬あじきして頤あじを出す。女房は面白半分、見返りもしないで、

「取りに来たらお払いやすな。」

「ええ……と三百は三銭かい。」

で、算盤を空に弾はじく。

「女房おかみさん。」

と呼んだ門附の声が沈んだ。

「何んです。」

「立続けにもう一つ。そして後あとを直ぐ、合点がってんかね。」

「あい。合点でございますが、あんた、豪えらい大酒たいしゆですな。」

「せめて酒でも参らずば。」

と陽気な声を出しかけたが、つと仰向あおむいて眦まなじりを上げた。

「あれ、また来たぜ、按摩の笛が、北の方の辻から聞える。……ヤ、そんなにまだ夜は更けまいのに、屋根越の町一つ、こう……田圃たんぼの畔あぜかとも思う処でも吹いていら。」

と身忙みせわしそうに片膝立てて、当所あてどなく睜みまわしながら、

「音おとは同じだが音ねが違う……女房おかみさん、どれが、どんな顔つらの按摩だね。」

と聞く。……その時、白眼しろまなこの座頭の首が、月に蒼あおざめて覗のぞきそうに、屋の棟を高く見た……目が鋭い。

「あれ、あんた、鹿の雌雄めすおすではあるまいし、笛の音で按摩の容よ子は分りませぬもの。」

「まったくだ。」



と寂しく笑った、なみなみ注いだる茶碗の酒を、屹と見ながら、  
 「杯の月を酌もうよ、座頭殿。」と差俯さしうつむいて独言ひとりごとした。  
 ……が博多節の文句か、知らず、陰々として物寂しい、表の障子  
 も裏透くばかり、霜の月の影冴えて、辻に、町に、按摩の笛、そ  
 のあるものは波に響く。

## 六

「や、按摩どのか。何んだ、唐突だしぬげに驚かせる。……要らんよ。  
 要りませぬ。」

と弥次郎兵衛。湊屋の奥座敷、これが上段の間とも見える、次

に六畳の附いた中ちゆうぶる古この十畳。障子の背後うしろは直ぐに縁、欄干てすりに  
 ずらりと硝子戸がらすどの外は、水みづ煙けむり渺びようとして、曇らぬ空に雲かと  
 見る、長洲ながすの端に星一つ、水に近く晃きらめいた、揖斐川の流れの  
 裾すそは、潮を籠めた霧白く、月にも苦とまを伏せ、蓑みのを乾ほす、繫かかり船ぶね  
 の帆柱がすすくと垣根に近い。そこに燭台かたわらを傍わらにして、火桶ひおけに  
 手を懸けんけ、怪訝けげんな顔して、  
 「はて、お早いお着きお草臥くたびれ様で、と茶を一ツ持つて出て、年と  
 増しまの女中が、唯ただいま今引込んだばかりの処。これから膳ぜんにもしよう、  
 酒にもしようと思うちよつとの隙間へ、のそりと出した、あの面つら  
 はえ?……

この方、あの年増めを見送つて、入交いりかわつて来るは若いのか、

と前髪の正面でも見ようと思えば、霜げた冬瓜とうがんに草鞋わらじを打着ぶちつけた、という異体つらな面ふすまを、襖はすの影から斜はすに出して、

(按摩あんまでやす。)とまた、悪く抜衣紋ぬきえもんで、胸を折ひつて、横坐よこまりに、蠟燭ろうそく火びへ紙火屋かみぼやのかかった灯あかりの向むかうへ、ぬいと半身みみで出た工合あつちやうが、見越みこし入道にゆうどうの御館おやかたへ、目見得めみえの雪女郎ゆきむすめを連れて出た、化ばけの慶庵けいあんと言う体ていだ。

要いらぬと言いえば、默然だんまりで、腰こしから前さきへ、板廊下いたなごの暗くらい方かたへ、スーと消きえたり……怨敵おんてき、退散たいさん。」

と苦笑くせういして、……床とこの正面まへに火桶ひおけを抱かかえた、法然ほうねん天窓あたまの、連つれの、その爺様おやさまを見遣みつかつて、

「捻平ねんぺいさん、お互たがひに年としは取りとりたくないでね。ちと三三ぺんぺん絃げんでも、と

あるべき処を、お膳の前に按摩が出ますよ。……見くびつたものではないか。」

「とかく、その年効としがもなく、旅籠屋の式台口から、何んと、事も慇懃いんぎんに出迎えた、家の隠居うちらしい切髪の婆様ばあさまをじろりと見て、

(ヤヤ、難有ありがたい、仏壇の中に美婦たばが見えるわ、簀すの子の天井から落ち度たい。)などと、膝栗毛の書抜きを遣らつしやるで魔まが魅さすのじや、屋台は古いわ、造りも広大。」

と丸木の床柱を下から見上げた。

「千年の桑かの。川の底も料はかられぬ。燈あかりも暗いわ、獺かわうそも出ようず。ちと懲こりさつしやるが可いい。」

「さん候ぞうろう、これに懲りぬ事なし。」

と奥歯のあたりを膨らまして微笑ほほえみながら、両手を懐に、胸を  
 拡く、襖ふすまの上なる額を読む。題して曰いわく、臨風榜可小楼りんふうぼうかしようろう。

「……とある、いかさまな。」

「床に活いけたは、白の小菊じや、一束ひとたばにして拵つかみざし、喝采おほ。」  
 と讚ほめる。

「いや、翁おきな寂なさびた事を言うわ。」

「それぞれ、たつたいま懲りると言うた口の下から、何んじや、  
 それは。やあ、見やれ、其許そこの袖口から、茶色の手の、もそもそ  
 とした奴やつが、ぶらりと出たわ、揖斐川の獺かわうその。」

「ほい、」

と視<sup>なが</sup>めて、

「南無<sup>なむさんぼう</sup>三宝。」と慌<sup>あわただ</sup>しく引込<sup>ひっこ</sup>める。

「何んじやそれは。」

「ははははは、拙者<sup>そこの</sup>うまれつき粗忽<sup>そごつ</sup>にいたして、よくものを落す  
処<sup>ばばあ</sup>から、内の婆<sup>ばばあ</sup>どのが計略<sup>けいりやく</sup>で、手袋<sup>てぶくろ</sup>を、ソレ、ト左右糸<sup>つな</sup>で繫<sup>つな</sup>いだ  
ものさね。袖<sup>そで</sup>から胸<sup>むね</sup>へ潜<sup>くぐ</sup>らして、ずいと引張<sup>ひっぱ</sup>つて両手<sup>りやうて</sup>へ嵌<sup>は</sup>めるだ。  
何んと恐<sup>おそ</sup>しかろう。捻平<sup>ねいへい</sup>さん、かくまで身<sup>しん</sup>上<sup>じやう</sup>を思<sup>おも</sup>うてくれる  
婆<sup>ばあ</sup>どのに對<sup>たい</sup>しても、無駄<sup>むだ</sup>な祝儀<sup>しゆぎ</sup>は出<sup>で</sup>せませんな。ああ、南無<sup>なむあみ</sup>阿弥<sup>あみ</sup>

陀<sup>だ</sup>仏<sup>ぶつ</sup>。」

「狸<sup>たぬき</sup>めが。」

と背<sup>せ</sup>を円<sup>ま</sup>くして横<sup>よこ</sup>を向<sup>む</sup>く。

「それ、年増が来る。秘すべし、秘すべし。」

で、手袋をたくし込む。

処へ女中が手を支ついて、

「御支度をなさりますか。」

「いや、やつと、今草鞋わらじを解いたばかりだ。泊めてもらうから、

支度はしません。」と真面目に言う。

色は浅黒いが容子ようすの可いい、その年増の女中が、これには妙な顔をして、

「へい、御飯は召あがりますか。」

「まず酒から飲みます。」

「あの、めしあがりますものは？」

「姉さん、ここは約束通り、やきはまぐり焼蛤が名物だの。」

## 七

「そのな、焼蛤は、今も町はずれのよしずばり葦簣張なんぞでいたします。やっぱりまつかさ松毬で焼きませぬとおいし美味うござりませんで、うち当家では蒸したのを差上げます、みりん味淋入れてあじよ味美う蒸します。」

「ははあ、さざえ栄螺のつぼやき壺焼といった形、大道店で遣りますな。……松並木を向うに見て、松毬のちよろちよろ火、蛤の煙がこの月夜に立とうなら、とんと童宮のでんがく田楽で、おとひめさま乙姫様がしやれ洒落にあね姉さんかぶりを遊ばそうという処、また一段のおもむき趣だろうが、わざとそれ



がために忍んでも出られまい。……当家の味淋蒸、それが好かるう。」

と小父者納得した顔して頷く。

「では、蛤でめしあがりますか。」

「何？」と、わざとらしく耳を出す。

「あのな、蛤であがりますか。」

「いや、箸で食いやしよう、はははは。」

と独ひとりで笑って、懐中から膝栗毛の五編を一冊、ポンと出して、

「難有ありがたい。」と額を叩く。

女中も思わず噴飯ふきだして、

「あれ、あなたは弥次郎兵衛様でございますな。」

「その通り。……この度の参宮には、都合あつて五二館と云うのへ泊つたが、ないぐうさま内宮様へ参る途中、ふるいち古市の旅籠屋、藤屋の前を通つた時は、前度いかい世話になつた気で、薄暗いまで奥深いあの店みせさき頭に、しんちゆう真鍮の獅嚙火鉢がぴかぴかとあるのを見て、略儀ながら、車の上から、帽子を脱いでお辞儀をして来た。が、町が狭いので、向う側の茶店の新姐しんぞに、この小すこ兀はげを見せるのが辛かつたよ。」

あかりと燈に向けて、てらりと光らす。

「ほほ、ほほ。」

「あはは。」

で捻平も打笑うと、……この機会に誘われたか、——さつき先刻二人

が着いた頃には、三味線太鼓で、トトン、ジャカジャカじやじや  
 じやんと沸返るばかりだった——ちようど八ツ橋形に歩行板あゆみが架か  
 っつて、土間を隔てた隣の座敷に、およそ十四五人の同勢で、女交  
 りに騒いだのが、今しがた按摩が影を見せた時分から、大河おおかわの  
 汐しおに引かれたらしく、ひとしきり人氣勢ひとけはいが、遠くへ裾拡がりに  
 茫ぼうと退いて、寂しんとした。ただだだっ広い中を、猿が鳴きながら走  
 廻るように、キャキャとする雛妓おしやくの甲かんばし走はしった声が聞えて、重  
 く、ずっしりと、覆おっかぶさる風かぜに、何を話すともなく多人数たにんずの物  
 音おとのしていたのが、この時、洞穴ほらあなから風が抜けたように哄どっと動  
 揺よめく。

女中も笑い引きに、すつと立つ。

「いや、この方は陰々としている。」

「その方が無事で可いの。」

と捻平は火桶の上へ脊くぐまつて、そこへ投出した膝栗毛を差さしのぞ覗のぞき、

「しかし思いつきじや、私はわしどうもこの寝つきが悪いで、今夜は一つまくらもと枕許あんどんの行燈で読んでみましょう。」

「止よしなさい、これを読むと胸せまが切つて、なお目が冴えて寝られなくなりませう。」

「何を言わつしやる、当あてごと事もない、膝栗毛を見て泣くものがあるかい。私わしが事を言わつしやる、其そ許こがよつほど捻平じや。」

と言う処へ、以前の年増に、小女こおんながついて出て、膳と銚子を

揃えて運んだ。

「蛤は直じきに出来ます。」

「可よし、可。」

「何よりも酒の事。」

捻平も、猪口ちよこを急ぐ。

「さて汝てめえにも一つ遣ろう。爛かんの可い処を一杯遣らつし。」と、弥

次郎兵衛、酒飲みの癖で、ちとぶるぶるする手に一杯傾けた猪口ちよこを、膳の外へ、その膝栗毛の本の傍わきへ、畳の上にちやんと置いて、

「姉さん、一つ酌ついでやってくれ。」

と真顔で言う。

小女が、きよとんとした顔を見ると、捻平に追っかけの酌をし

ていた年増が見向いて、

「喜野きのの、お酌しやくぎ……その旦那はな、弥次郎兵衛様じやで、喜多八さんにお杯を上げなさるんや。」

と早や心得たものである。

八

小父者おじごはなぜか調子を沈めて、

「ああ、よく言った。俺おれを弥次郎兵衛は難有ありがたい。居心いごころは可よし、酒

は可。これで喜多八さえ一所いしょだったら、膝栗毛しろうを正しょうのもので、太平の民となる処を、さて、杯をさしたばかりで、こう酌しやくいだ酒へ、

蠟燭ろうそくの灯ひのちらちらと映る処は、どうやら餓鬼たむに手向けたようだ。あのまた馬鹿野郎はどうしている——」と膝つに手を支つき、畳の杯じゅっを凝じゅっと見て、陰気な顔する。

捻平ねいへいも、ふと、この時横を向いて腕組した。

「旦那、その喜多八きだはちさんを何んでお連れなさりませんね。」

と愛嬌あいきよう造つつて女中にようぢゆうは笑う。弥次郎やじろう寂さみしく打笑み、

「むむ、そりや何よ、その本の本文にある通り、伊勢の山田ではぐれた奴さ。いい年をして娑婆しやば気けな、酒も飲めば巫山ふざけ戯けもするが、世の中は道中同然。暖いにつけ、寒いにつけ、杖柱つえとも思う同伴どうはんの若いものに別れると、六十の迷児まいごになつて、もし、この辺に柵しほりからぶら下がったような宿屋はござりませんか、賑にぎやかな町

の中を独りとぼとぼと尋ね飽倦あぐんで、もう落胆がっかりしやした、と云つてな、どつかり知らぬ家うちの店頭みせさきへ腰を落込おとしこんで、一服無心をした処……あすこを読むと串じょうだん戯でんではない。……捻平さん、真からもつて涙が出ます。」

と言う、まぶた瞼まぶたに映つて、蠟燭の火がちらちらとする。

「姉や、心しんを切つたり。」

「はい。」

と女中が向うを向く時、捻平も目をしばたたいたが、

「や、あの騒ぎわい。」

と鼻の下を長くして、土間越どこしの隣室となりへ傾き、

「豪えらいぞ、金かな盃だらひまで持ち出いたわ、人間は皆裾が天井へ宙乗



りして、畳を皿小鉢が躍るそう。おおお、三味線太鼓が鑄しのぎを削つて打合う様子じゃ。」

「もし、お騒がしゅうござりましょう、お気の毒でござります。ちようど霜月でな、今年度の新兵さんが入営なさりますで、その送別会じや言うて、あつちこつち、皆、この景気でござります。でもな、お寝よります時分には時間になるので静まりましょう。どうぞ御辛抱なさいまして。」

「いやいや、それには及ばぬ、それには及ばぬ。」

と小父者、二人の女中の顔へ、等分に手を掉ふつて、

「かえつて賑かで大きに可い。悪く寂ひっそり寞して、また唐突だしぬけに按摩に出られては弱るからな。」

「へい、按摩がな。」と何か知らず、女中も読めぬ顔して聞返す。  
 捻平この話を、打消すように咳しわぶきして、

「さ、一いっこん献参ろう。どうじゃ、こちらへも酌人をちと頼んで、

……ええ、それ何んとか言うの。……桑名の殿様時雨しぐれでお茶漬：

……とか言う、土地の唄でも聞こうではないかの。陽気にな、かつ

と一つ。旅の恥は搔棄かきすてじゃ。主ぬしはソレ叱言こごとのような勧進帳でも

遣らつしやい。

染めようにも髯ひげは無ないで、私わしはこれ、手拭でも畳ほうねんんで法然あた天

窓まへ載のせようでの。」と捻平が坐りながら腰を伸のして高く居直

る。と弥次郎眼まなこを睜みはつて、

「や、平家以来の謀叛むほん、其許そこの発議は珍らしい、二方にほう荒神鞍こうじんくらな

しで、真中へ乗りやしよう。」

おびただと夥しく景気を直して、

「姉え、あんね何んでも構わん、四五人木遣で曳いて来い。」

と肩を張つて大きに力む。

女中酌の手を差控えて、銚子を、膝に、と真直まっすぐに立てながら、

「さあ、今あつちの座敷で、もう一人二人言うて、お掛けやしたが、喜野、芸妓げいこさんはあつたかな。」

小女が猪首いくびで頷うなずき、

「誰も居やはらぬ言うてでやんした。」

「かいな、旦那さん、お気の毒さまでござります。狭い土地に、数のない芸妓やによつて、こうして会なんぞ立たて込みますと、目星めぼし

い妓<sup>こ</sup>たちは、ちやつとの間に皆出<sup>みんな</sup>払います。そうか言うて、東京のお客様に、あんまりな人も見せられはしませずな、容色<sup>きりよう</sup>が好いとか、芸がたぎったとかいのでござりませぬとなあ……」

「いや、こうなつては、宿賃を払わずに、こちとら夜遁<sup>よにげ</sup>をするまでも、三味線を聞かなきや納まらない。眇<sup>めっかち</sup>、いぐちでない以上は、古道具屋からでも呼んでくれ。」

「待ちなさりますし。おお、あの島屋の新妓<sup>しんこ</sup>さんならきつと居るやろ。聞いて見や。喜野、ソレお急ぎじや、廊下走つて、電話<sup>かか</sup>へ掛れや。」

「持つて来い、さあ、何んだ風車。かざぐるま」

急に勢いきおいの可いいい声を出した、饅頭屋に飲む博多節の兄あにい哥は、霜の上の爛かんざけ酒で、月あかりに直さぐ醒める、色の白しろいのもそのままであつたが、二三杯、呷あおつきり切の茶碗酒で、目の縁ふちへ、颯さつと酔よが出た。

「勝手にピイピイ吹いておれ、でんでん太鼓しやうに笙ふえの笛、こつちあ小児こどもだ、なあ、阿媽おつか。……いや、女房おかみさん、それにしても何かね、御当処は、この桑名と云う所は、按摩の多い所かね。」と笛の音に瞳がちらつく。

「あんたもな、按摩の目は蠅かきや云います。名物は蛤はまぐりじやもの、別

に何も、多い訳はないけれど、ここは新地しんちなり、旅籠屋のある町やに因つて、つい、あの衆しゆが、あちこちから稼わぎに来るわな。「そうだ、成程新地くるわだった。」となぜか一人で納得して、気の抜けたような片手を支つく。

「お師匠さん、あんた、これからその音声のどを芸妓屋げいこやの門かどで聞かしてお見やす。ほんに、人死ひとしにが出来ようも知れぬぜな。」と襟の処で、塗盆をくるりと廻す。

「飛んだ合せかがみだね、人死が出来て堪たまるものか。第一、芸げいし妓屋やの前へは、うっかり立てねえ。」

「なぜえ。」

「悪くすると敵かたきに出会でつくわす。」と投首なげくびする。

「あれ、芸が身を助けると言う、……お師匠さん、あんた、芸妓げいこゆえの、お身の上かえ。……ほんにな、仇かたきだすな。」

「違つた！ 芸者の方で、私が敵さ。」

「あれ、のけのけと、あんな憎いこと言いなさんす。」と言う処へ、月は片明りの向う側。狭い町の、ものの氣勢けはいにも暗い軒下を、からころ、からころ、駒下駄こまげたの音が、土間に浸込しみこむように響いて来る。……と直ぐその足許あしもとを潜くぐるように、按摩の笛が寂しく聞える。

門附は屹きつと見た。

「噂をすれば、芸妓げいこはんが通りまつせ。あんた、見たいなら障子を開けやす……そのかわり、敵打たりようと思つてな。」

「ああ、いつでも打たれてやら。ちよツ、可厭いやうるさに煩うるさく笛を吹くない。」

かたりと門かどの戸を外から開ける。

「ええ、吃びっくり驚すら。」

「今晚は、——饅飩六ツ急いでな。」と草履穿ぞうりばきの半纏着はんてんぎ、背  
中へ白く月を浴びて、赤い鼻をぬいと出す。

「へい。」と筒抜けの高調子で、亭主帳場へ棒つったに突立ち、

「お方、そりや早うせぬかい。」

女房は澄ましたもので、

「美しい燈あしおと音やな、どこの？」と聞く。

「こないだ山田の新町から住替えた、こんの島家の新妓しんこじゃ。」



と言いながら、鼻赤の若い衆は、覗いた顔を外に曲げる。

と門附は、背後の壁へ胸を反らして、ちよつと伸上るようにして、戸に立つ男の肩越しに、咬とした月の廓の、細い通を見透かした。

駒下駄はちと音低く、まだ、からころと響いたのである。

「沢山出なさるかな。」

「まあ、こんの饅飩のようには行かぬで。」

「その気で、すぐに届けますえ。」

「はい頼みます。」と、男は返る。

亭主帳場から背後向きに、日和下駄を探つて下り、がたりびしりと手当り強く、そこへ広蓋を出掛ける。ははあ、夫婦二人の

この店、氣の毒千万、御亭が出前持を兼ねると見えたり。

「裏表とも氣を注<sup>つ</sup>けるじゃ、可<sup>え</sup>いか、可<sup>え</sup>いか。ちよつと道寄りをして来るで、可<sup>え</sup>いか、お方。」

とそこいらじろじろと睨<sup>ねめ</sup>廻<sup>まわ</sup>して、新地の月に提灯入<sup>ちようちん</sup>らず、片手懐にしたなりで、亭主が出前、ヤケにがつと戸を開<sup>あ</sup>けた。後<sup>あと</sup>を閉めないで、ひよこひよこ出て行く。

釜の湯氣<sup>さつ</sup>が颯と分れて、門附の頬に影がさした。

女房横合から来て、

「いつまで、うっかり見送<sup>かたき</sup>つてじゃ、そんなに敵<sup>かたき</sup>が打たれたいの

。」

「女房<sup>おかみ</sup>さん、桑名じゃあ……芸者の箱屋は按摩かい。」と悚<sup>ぞつ</sup>氣と

したように肩を細く、この時やつと居直つて、女房を見た、色が悪い。

## 十

「そうさ、いかに伊勢の浜荻はまおぎだつて、按摩の箱屋といふのはな  
 かるう。私もなかるうと思うが、今向う側を何とか屋の新妓しんこと  
 か云うのが、からんころんと通るのを、何心なく見送ると、あの、  
 一軒おき二軒おきの、軒行燈のきあんどんでは浅葱あさぎになり、月影では青くな  
 つて、薄い紫の座敷着で、褌つまを蹴出けださず、ひっそりと、白い襟を  
 俯向うつむいて、足の運びも進まないように何んとなく悄しおれて行く。：

…その後から、鼠色の影法師。女の影なら月に地を這う筈だに、寒い道陸神が、のそのそと四五尺離れた処を、ずっと前方まで附添ったんだ。腰附、肩附、歩行く振、捏ちちて附着けたような不恰好な天窓の工合、どう見ても按摩だね、盲人らしい、めない千鳥よ。…私あ何んだ、だから、按摩が箱屋をすると云っちゃ可笑い、盲目になった箱屋かも知れないぜ。」

「どんな風の、どれな。」

と門へ出そうにする。

「いや、もう見えない。呼ばれた家へ入ったらしい。二人とも、ずっと前方で居なくなつた。そうか。ああ、盲目の箱屋は居ねえのか。アまた殖えたぜ…影がさす、笛の音に影がさす、按摩の

笛が降るようだ。この寒い月に積つもつたら、桑名の町は針の山になるだろう、堪たまらねえ。」

とぐいと呷あおつて、

「ええ、ヤケに飲め、一杯どうだ、女房おかみさん附合あいねえ。御亭主は留守だが、明あけつばな放はなしよ、……構かまうものか。それ向う三軒の屋根越のぞに、雪坊主のような山の影が覗のぞいてら。」

と門を振向き、あ、と叫んで、

「来た、来た、来た、来やあがった、来やあがった、按摩あんま々々、按摩。」

と呼吸いきも吐つかず、続けつぎまに急せき込んだ、自分の声こゑに、町の中に、ぬい、と立たつて、杖つゑを脚あしもと許もとへ斜はす交つかいに突張つりながら、目を白

く仰向あおむいて、月に小鼻を照らされた流しの按摩が、呼ばれたものと心得て、そのまま凍いてつ附くように立留まったのも、門附はよく分さまらぬ状で、

「影か、影か、阿媽おつかあ、ほんとの按摩か、影法師か。」  
と激しく聞く。

「ほんとなら、どうおしる。貴下あんた、そんなに按摩さんが恋しいかな。」

「恋しいよ！ ああ、」  
と呼吸いきを吐ついて、見直して、眉ひそを顰ひそめながら、声こわだか高たかに笑った。  
「ははははは、按摩にこがれてこの体ていさ。おお、按摩さん、按摩さん、さあ入いってくんねえ。」

門附は、撥ばちを除のけて、床几しょうぎを叩たたいて、

「一つ頼たのもう。女房おかみさん、済すまないがちよいと借かりるぜ。」

「この畳畳へ来て横よこにおなりな。按摩あんまさん、お客おきゃくだす、あとを閉しめておくんなさい。」

「へい。」

コトコトと杖つえの音ね。

「ええ……とんと早はやや、影法師かげ法師も同然どうぜんなもので。」と掠かすれ声を白しろく出して、黒くろいけんちゆう羊羹ようかん色いろの被布ひふを着きた、燈ともの影かげは、赤あかくその皺しわの中なかへさし込こんだが、日和下駄ひよりくだから消くえても失うせせず、片かた手を泳およぎ、片手かたてで酒さけの香かぎわを嗅かぎ分わけるように入いった。

「聞きえたか。」

とこの門附は、権のあるものいいで、五六本銚子の並んだ、膳をまた傍わきへずらす。

「へへへ」とちよつと鼻をすすつて、ふん、とけなりそうに香においを嗅かぐ。

「待ちこがれたもんだから、戸外そとを犬が走つても、按摩さんに見えたのさ。こう、悪く言うんじやないぜ……そこへぬつくりと顯あらわれたろう、酔っている、幻かと思つた。」

「ほんに待兼ねていなさつたえ。あの、笛の音ばかり気にしなさるので、私もどうやら解よめなんだが、やつと分つたわな、何んともお待遠でござんしたの。」

「これは、おかみさま、御繁昌ごはんじやう。」



「お客はお一人じゃ、ゆつくり療治してあげておくれ。それなりにお寝よつたら、お泊め申そう。」

と言う。

按摩どの、けろりとして、

「ええ、その気で、念入りに一ツ、搦つかまりましょうで。」と我が手を握ひつて、拉ひぐように、ぐいと揉もんだ。

「へい、旦那。」

「旦那じゃねえ。ものもらいだ。」とまた呷あおる。

女房が竊そつと睨にらんで、

「滅相な、あの、言いなさる。」

## 十一

「いや、横になるどころじゃない、沢山だ、ここで沢山だよ。：  
 第一背中へ掴つかまれて、一呼吸ひといきでも応こたえられるかどうか、実  
 はそれさえ覚束おぼつかない。悪くすると、そのまま目を眩まわして打倒ぶつたお  
 れようも知れんのさ。体ていよく按摩あんまさんに掴み殺ころされるといった形  
 だ。」

と真顔で言う。

「飛んだ事をおっしゃりませ、田舎でも、これでも、長年年期を  
 入れました杉山流のものでござります。鳩尾きゆうびに鍼はりをお打たせに  
 なりまして、決して間違まちがいのあるようなものではござりませぬ

。「と呆あきれたように、按摩あんまの剥むく目は蒼あおかりけり。

「うまい、まずいを言うのじゃない。いつの幾いく日かにも何時なんどきにも、洒落しやれにもな、生れてからまだ一度も按摩あんまさんの味を知らないんだよ。」

「まあ、あんなにあんた、こがれなさった癬かぶに。」

「そりや、張はつて張はつて仕様がないから、目めにちらつくほど待まちつたがね、いざ……となると初ういざん産さんです、灸きゆうの皮切きも同おなじ事ことさ。どうにも勝手かたが分わらない。痛いたいんだか、痒かゆいんだか、風説うわさに因よると擦くすくつたいとね。多分たぶん私も擦くすくつたかろうと思おもう。……ところがあいにく、母おふくろ親おが操正ましく、これでも密ま夫おとこの児こじやないそううで、その擦くすくつたがりようこの上うなし。……あれ、あんなあの、握にぎりめ

飯しを拵こぎえるような手附てづをされる、とその手で揉まれるかと思つたばかりで、もう堪たまらなく擦こつたい。どうも、ああ、こりや不可いけえ。」

と脇腹りょうひへ両りょう肱ひじを、しつかりついて、搔か竦いむように脊筋せきじんを捻よる。

「ははははは、これはどうも。」と按摩は手持不沙汰な風。

女房めかけ更あらためて顔かほを覗のぞいて、

「何んと、まあ、可愛らしい。」

「同じ事を、可かわい哀い想そうだ、と言いつてくんねえ。……そうかと言いつ

て、こう張はつちや、身みも皮かわも石いしになつて固かたりそうな、背せが詰つまつて

胸むねは裂ひける……揉もんでもらわなくては遣やり切きれない。遣やりれ、構かまわな

い。」

と激しい声して、片膝を屹きつと立て、

「殺す気で蒐かかれ。こつちは覚悟だ、さあ。ときに女房おかみさん、袖摺そでず

り合うのも他生たしやうの縁ツさ。旅空掛けてこうしたお世話を受ける

のも前さきの世の何かだろう、何んだか、おなごりが惜おしいんです。掴つか

殺かみころされりやそれきりだ、も一つ憚はばかりだがついでおくれ、別れ

の杯さかずきになろうも知れん。」

と雫しずくを切つて、ついと出すと、他愛なさもあんまりな、目の色

の変りよう、眦まなじりも屹きつとなつたれば、女房は氣を打たれ、默然だんまりで

ただ目を睜みはる。

「さあ按摩さん。」

「ええ、」

「女房さんおかみ酌ついどくれよ！」

「はあ、」と酌をする手がちと震えた。

この茶碗を、一息に仰ぎ干すと、按摩が手を掛けたのと一緒にあつた。

がたがたと身震いしたが、面は幸おもてきいに紅潮して、

「ああ、腸はらわたへ沁しみ透とおる！」

「何かその、何事か存じませぬが、按摩は大丈夫でござります。と、これもおどつく。」

「まず、」

と突張つっぱった手をぐたりと緩めて、

「生命いのちに別条は無さそうだ、しかし、しかしこた応える。」

とがつくり俯向うつむいたのが、ふらふらした。

「月は寒し、炎のようなその指が、火水となつて骨に響く。胸は冷い、耳は熱い。肉みは燃える、血は冷える。あつ、」と言つて、両手を落した。

吃驚びっくりして按摩が手を引く、その嘴くちばしや鰭したこに似たり。

兄哥あにいは、しつかり起直つて、

「いや、手をやすめず遣つてくれ、あわれと思つて静しずかに……よしんば徐そつと揉まれた処で、私は五体が碎ける思いだ。

その思いをするのが可厭いやさに、いろいろに悩んだんだが、避よければ摺すり着く、過ぎれば引張ひっぱる、逃げれば追う。形が無ければ声が

する……パイパイ笛は攻せめだいこ太鼓だ。こうひしひしと寄よ着つかれちや、  
 弱いものには我慢が出来ない。淵ふちに臨まんで、崖がけの上に瞰み下おろして  
 踏ふみとど留とどまる胆きも玉だまのないものは、いつその思い、真ま逆さかに飛ま込ま  
 みます。破れかぶれよ、按摩さん、従いとこ兄弟はとこ再とこ従とこ兄弟か、伯おじ父おい甥かか、  
 親類なら、さあ、敵かたきを取とれ。私はね、……お仲間の按摩を一人殺  
 しているんだ。」

## 十二

「今からちようど三年前。……その年は、この月から一月後おくれの師し  
 走わすの末すに、名古屋へ用があつて来た。ついぞと言つては悪いけれ



ど、稼かせぎの繰廻しがどうにか附いて、参宮が出来るといふのも、お伊勢様の思おぼしめし召みよ、冥加みよがのほど難有ありがたい。ゆつくり古市ふるいちに逗留とどり留ゆうして、それこそついでに、……浅熊山あさまやまの雲も見よう、鼓ヶ嶽たけしらべの調も聞こう。二見ふたみじゃ初日を拝んで、堺橋から、池の浦、沖の島で空が別れる、上郡かみごおりから志摩へ入つて、日和山ひよりやまを見物する。……海が凪ないだら船を出して、伊良子ヶ崎いらこの海鼠なまこで飲もう、何でも五日六日は逗留とどりというつもりで。……山田では尾上町の藤屋へ泊つた。驚くべからず——まさかその時は私だつて、浴衣に拾あわせじや居ゐやしない。

着換えに紋付もんつきの一枚も持つた、縞しまで襲衣かさねの若旦那さ。……ま、こう、雲助が傾城買けいせいがいの昔を語る……負惜まけおしみを言うのじやない

よ。何も自分の働きでそうした訳じゃないのだから。——聞きねえ、親なり、叔父なり、師匠なり、恩人なりという、……私が稼業じや江戸で一番、日本中の家元の大黒柱と云う、少元すこはげの苦い面つらした阿父おやしがある。

いや、その顔がん色しよくに似合わない、気さくに巫山戯ふざけた江戸兎えどっこね。行年ぎょうねんその時六十歳を、三つと刻んだはおかしいが、数え年のサバを算よんで、私が代理に宿帳をつける時は、天地人とか何んとか言つて、禅ぜんの問答をするように、指を三本、ひよいと出してギロリと睨にらむ……五十七歳とかけと云うのさ。可いいかね、その気だもの……旅籠屋の女中が出てお給仕をする前では、阿父おとつさんが大の禁句さ。……与一兵衛じやあるめえし、汝てめえ、定九郎さだくろうのよ

うに呼ぶなえ、と唇を捻曲<sup>ねじま</sup>げて、叔父さんとも言わせねえ、兄さんと呼べ、との御意だね。

この叔父さんのお供だろう。道中の面白さ。酒はよし、景色はよし、日和は続く。どこへ行つても女はふらない。師走の山路に、嫁菜が盛りで、しかも大輪<sup>おおりん</sup>が咲いていた。

とこの桑名、四日市、亀山と、伊勢路へ掛<sup>か</sup>つた汽車の中から、おなじ切符のたれかれが——その催<sup>もよお</sup>しについて名古屋へ行った、私たちの、まあ……興行か……その興行の風説<sup>うわさ</sup>をする。嘘にもどうやら、私の評判も可<sup>よ</sup>さそうな。叔父はもとより。……何事も言うには及ばん。——私が口で饒舌<sup>しゃべ</sup>つては、流儀の恥になろうから、まあ、何<sup>なに</sup>某<sup>がし</sup>と言つたばかりで、世間は承知すると思つて、聞き

ねえ。

ところがね、その私たちの事を言うついでに、この伊勢へ入つてから、きつと一所に出る、人の名がある。可いかい、山田の古市そういちに惣そういち市あんまはりと云う按摩鍼だ。」

門附はその名を言う時、うつとりと瞳を据えた。背せなかを抱いだくように背後うしろに立つた按摩にも、床几しょうぎに近く裾を投げて、向うに腰を掛けた女房にも、目もくれず、凝じつと天井を仰ぎながら、胸むな前さきにかかると湯気を忘れたように手で捌さばいて、

「按摩だ、がその按摩が、旧もとはさる大名に仕えた士族はての果で、聞きねえ。私等が流儀と、同じおんなその道の芸の上手。江戸の宗家も、本山も、当国古市において、一人で兼ねたり、といいきう勢おいで、自ら

宗山そうざんと名告なのる天狗てんぐ。高慢も高慢だが、また出来る事も出来る。

……東京の本場から、誰も来て怯おびかされたそれがし。某も参まゐつて拉ひがれた。

あれで一眼でも有ろうなら、三重県に居る代物しろものではない。今度

名古屋へ来た連中もそうじゃ、贖物にせものではなからうから、何も宗

山に稽古をしてもらえとは言わぬけれど、鰻うなぎの他ほかに、鯛たいがある、

味を知つて帰れば可いに。——と才さい発はけた商人あきんど風のと、でつ

ぷりした金の入歯いばの、土地の物持とも思われる奴の話したのが、

風説うわさの中でも耳に付いた。

叔父はこくこく坐いねむり睡ねむをしていたわつし。私あ若氣だ、襟巻で顔

を隠にして、睨にらむように二人を見たのよ、ね。

宿の藤屋へ着いてからも、わざと、叔父を一人で湯へ遣り……

女中にもちよつと聞く。……挨あいさつ拶さつに出た番頭にも、按摩の惣市、宗山と云う、これこれした芸人が居るか、と聞くと、誰の返事も同じ事。思つたよりは高名で、現に、この頃も藤屋に泊つた、何なににがしこう某侯の御隠居の御召に因つて、上かみ下しもで座敷を勤した時、（さてもな、鼓ヶ嶽が近いせいか、これほどの松風は、東京でも聞けぬ、）と御賞美。

（てき的等にも聞かせたい。）と宗山が言われます、とちよろりと饒し舌やべつた。わつし私ながか夥間を——（てき的等。）と云う。

的等の一人、かく言う私だ……」

「なお聞けば、古市のはずれに、その惣市、小料理屋の店をして、  
 妾めかけの三人もある、大した勢いきおいだ、と言うだろう。——何を！……按摩  
 の分際で、宗家の、宗の字、この道の、本山すさまが凄じい。

こう、按摩さん、舞台の差さしは堪忍かにしてくんな。」  
 と、竊そつと痛そうに胸をおき压えた。

「後で、よく気がつければ、信州のお百姓は、東京の芝居なんぞ、  
 ほんとの猪ししはないとて威張る。……な、宮重大根が日本一なら、  
 蕪かぶの千枚漬も皇国無双で、早く言えば、この桑名の、焼蛤も三都  
 無類さ。

その気で居れば可いものを、二十四の前厄なり、若氣のいちぢず一凶に

苛々いらいらして、第一その宗山が気に入らない。(的等。)もぐつと癩しやくに障れば、妾三人で赫かつとした。

維新以来の世がわりに、……一時私等ひとしきりの稼業がすたれて、夥間なかまが食うに困ったと思え。弓矢取つては一万石、大名株の芸人が、イヤ楊枝ようじを削る、かるめら焼を露店で売る。……蕎麦屋そばやの出前持になるのもあり、現在私おじごがその小父者などは、田舎の役場に小使いをして、濁り酒のかすに酔つて、田圃たんぼの畝あぜに寝たもんです。：

：

その妹だね、可いかい、私の阿母おふくろが、振袖の年頃を、困る処へ附込んで、小金こがねを溜めた按摩あぶなめが、ちとばかりの貸かせを枷かに、妾にしよう、と追ひ廻わす。——危あぶなく駒下駄を踏返して、駕籠かごでな



くつちや見なかつた隅田川へ落ちようとしたつき。——その話にも嫌いな按摩が。

ええ。

待て、見えない両眼で、汝が身の程を明く見るよう、療治を一つしてくりよう。

で、翌日は謹んで、参拝した。

その尊さに、その晩ばかりはちつとの酒で宵寝をした、叔父の夜具の裾を叩いて、枕許へ水を置き、

(女中、そこいらへ見物に、)

と言つた心は、穴を圧えて、宗山を退治る料簡。

と出た、風が荒い。荒いがこの風、五十鈴川で劃られて、宇治

橋の向うまでは吹くまいが、相の山の長坂を下から哄と吹上げる  
 ……これが悪く生温なまぬるくつて、灯あかりの前じや砂が黄色い。月は雲の  
 底どんよに淀りしている。神路山かみじやまの樹は蒼あおくても、二見の波は白から  
 う。酷ひどいい勢いきおい、ぱつと吹くので、たじたじとなる。帽子が飛ぶから、  
 そのまま、藤屋が店へ投返した……と脊筋へ孕はらんで、坊さんが忍  
 ぶように羽織の袖が翻ひらひら々する。着換えるのも面倒で、昼間のな  
 りで、神詣かみもうでの紋付き。——袖畳みに懐ふところ中へ捻ねじこ込んで、何の  
 洒落しやれにか、手拭で頬被りをしたもんです。

門附になる前兆さまさ、状を見やがれ。」と片手を袖へ、二の腕深  
 く突つ込んだ。片手で狙ねらうように茶碗をおさ圧えて、

「ね、古市へ行くと、まだ宵だのに寂ひっそり然そりしている。……軒が、

がたびしと鳴つて、軒行燈のきあんどんがぼツばツ揺れる。三味線さみせんの音もしたけれど、吹ふさらわれて大屋根へ猫の姿でけし飛ぶようさ。何の事はない、今夜のこの寂しい新地へ、風を持って来て、打ぶ着けたと思えば可い。

一軒、地つちのちと窪くぼんだ処ところに、溝板どぶいたから直ぐに竹の欄干てすりになつて、毛氈もうせんの端はは勿な上り、畳たたみに赤い島が出来て、洋燈ランプは油煙くすぶに燻くすぶつたが、真白まっしろに塗まつた姉さんが一人居る、空気銃、吹矢ふきやの店へ、ひよろりとして引掛ひっかかつたね。

取と着つきに、肱ひじを支ついて、怪しく正面まなこに眼まなこの光る、悟さとつた顔かほの達だ磨ま様さまと、女の顔かほとを、七分三分しちぶんさんぶんに狙ねらいながら、

(この辺へだに宗山むねやまツて按摩あんまは居ゐるかい。)とここで実は様子ようすを聞きく

気さ。押懸けて行こうたつてちつとも勝手が知れないから。

（先生様かね、いらつしやります。）と何と、（的等。）の一人に、先生を、しかも、様づけに呼ぶだろう。

（実は、その人の何を、一つ、聞きたくつて来たんだが、誰が行つても頼まれてくれるだろうか。）と尋ねると、大熨斗おおのしを書いた幕の影から、色の蒼い、鬢びんの乱れた、痩やせた中年増ちゆうどしまが顔を出して、（知己ちかづきのない、旅の方にはどうか知らぬ、お望のぞみなら、内から案内して上げましょうか。）と言う。

茶代を奮はず発はつんで、頼むと言った。

（案内して上げなはれ、可いい旦那や、気を付けて、）と目配めくばせをする、……と雑作はない、その塗ったのが、いきなり、欄干またを跨また

いで出る奴さ。」

十四

「両袖で口を塞いで、風の中を俯向いて行く。……その女の案内で、つい向う路地に入ると、どこも吹附けるから、戸を鎖したが、怪しげな行燈の煽つて見える、ごたごたした両側の長屋の中に、溝板の広い、格子戸造りで、この一軒だけ二階屋。

軒に、御手輕御料理としたのが、宗山先生の住居だった。

（お客様。）と云う女の送りで、ズツと入る。直ぐそこの長火鉢を取巻いて、三人ばかり、変な女が、立膝やら、横坐りやら、猫

板に頼杖やら、料理の方は隙らしい。……上あがりかまち 櫃この正面が、取と着ツきの狭はしごい階だん子段です。

(座敷は二階かい、)と突いきなり然ほおかむり 頬ほ被かむりを取つて上ろうとすると、風立つので燈あかりを置かない。真ま暗くらだからちよつと待つて、と色いろめいてざわつき出す。とその拍子に風のなぐれで、奴等の上の釣つり洋んぷ燈らがぱつと消えた。

そこへ、中なか仕切じきりの障子が、次の室まの燈あかりにほのめいて、二枚見えた。真ま中なかへ、ぱつと映つたのが、大坊主の額の出た、唇おほきの大い影法師。む、宗山め、居るな、と思うと、憎い事には……影法師の、その背中に掴つかまって、坊主を揉もんでるのが華き奢しゃらしい島田まげ鬘まげで、この影は、濃く映つた。

火燧マツチ々々、と女どもが云う内に、

(えへん) と咳せきばらいを太くして、大な手おおきで、灰吹を持上げたのが見え

て、離れて煙管きせるが映る。——もう一倍、その時図体が拡がったのは、袖を開いたらしい。此奴こいつ、寝ん寝子ねねこの広袖どてらを着ている。

やつと台洋燈を点つけて、

(お待遠でした、さあ、)

つて二階へ。吹矢の店から送つて来た女はと、中段からちよつと見ると、両膝をずしりと、そこに居た奴の背後うしろへ火鉢を離れて、俯向うつむいて坐つた。

(あの娘こで可いのかな、他ほかにもござりますよつて。)

と六畳の表座敷で低声で言うんだ。——ははあ、商売も大略あらまし

分つた、と思うと、其奴が

(お誂は。)

とおおき  
と大な声。

(あつさりしたものでちよつと一口。そこで……)

実は……御主人の按摩さんの、咽喉が一つ聞きたいのだ、と話した。

(咽喉?) ……と其奴がね、異に蔑んだ笑い方をしたものです。

(先生様の……でござりますか、早速そう申しませう。)

で、地獄の手曳め、急に衣紋繕いをして下りる。しばらくし

て上つて来た年紀の少い十六七が、……こりやどうした、よく言

う口だが芥溜はきだめに水仙です、鶴です。帯も襟も唐縮緬とうちりめんじやある



が、もみじのように美しい。結綿いわたのふつくりしたのに、浅葱鹿あさぎかの子の絞しぼ高だかな手柄を掛けた。やあ、三人あると云う、妾の一人か。おおん神の、お膝許ひざもとで沙汰の限りな！ 宗山坊主の背中を揉もんでた島田鬻ひれの影らしい。惜しや、五十鈴川の星と澄んだその目許なまも、鯨なまの鰭ひれで濁ろう、と可哀あわれに思う。この娘が紫ふくさの袱紗のに載のせて、薄茶を持って来たんです。

いや、御本山の御見識、その咽喉のどを聞きに来たととなると……客はかまにまず袴はを穿はかせる仕向しむけをするな、真剣勝負面白い。で、こつちも勢いきおい、懐ふところ中から羽織を出して着直したんだね。

やがて、また持出した、杯さかずきというのが、朱塗きんまに二見ヶ浦を金きんま蒔きえ絵えした、杯台すべに構かまえたのは凄すごかろう。

(まず一ツ上つて、こつちへ。)

と按摩の方から、この杯の指図をする。その工合が、謹んで聞  
け、といった、頗る権高なものさ。どかりとそこへ構え込んだ。

その容子が膝も腹もずんぐりして、胸中ほど咽喉が太い。耳の

傍から眉間へ掛けて、小蛇のように筋が畝くる。眉が薄く、鼻が

ひしやげて、ソレその唇の厚い事、おまけに頬骨がギシと出て、

歯を噛むとガチガチと鳴りそう。左の一眼べとりと盲い、右が白

ろまなこ  
眼で、ぐるりと翻った、しかも一面、念入の黒痘瘡だ。

が、争われないのは、不具者の相格、肩つきばかりは、みじ

めらしくしよんぼりして、猪の熊入道もがっくり投首の抜衣紋

で居たんだよ。」

## 十五

「いえな、何も私が意地悪を言うわけではないえ。」

と湊屋の女中、前垂の膝を堅くして——かたわら傍に柔かな髪ふっさの房りした島田びんの鬢びんを重そうに差俯さしうつむ向く……襟足えりあし白く冷たそうに、水紅とどろいろはぶたえの羽二重はぶたえの、無地の長襦袢ながじゆばんの肩すべが亘すべつて、寒げに脊筋せきすぢの抜けるまで、なよ嫋なよやかに、うちしお打うちしお悄しおれた、残のこんの嫁菜花よめなの薄紫うすむらさ、浅葱あさぎのようはたに目に淡い、藤色ふじいろ縮緬ちりめんの二枚着ふたまいぎで、姿すがたの寂さびしい、二十はたばかりの若い芸者うまいを流盼しりめに掛かけつつ、

「このお座敷ざしきは貫もろうて上げるから、なあ和女あんな、もうちやつと内うちへ

お去いにや。……島家の、あの三重みえさんやな、和女、お三重さん、

お帰り！」

と屹きつと言う。

「お前さんがおいでやで、ようお客さんの御機嫌を取つてくれる  
 であろうと、小女こおんなばかり附けておいて、私が勝手へ立違ちがうてい  
 る中うちや、……勿体ない、お客たちの、お年寄としよなが氣に入らぬか、  
 近頃山田から来た言うて、こちらの私の許とこを見くびつたか、酌しやくをせ  
 い、と仰おつしや有つても、浮々うきうきとした顔かほはせず……三味線さんみせん聞こうと  
 おつしやれば、鼻はなの頭かぶで笑わらうたげな。傍そばに居た喜野きよが見かねて、  
 私の袖そでを引きに来た。

先刻さつきから、ああ、こうと、口の酸すっぱくなるまで、機嫌きげんを取るよう

にして、私が和女の調子を取って、よしこの一つ上方唄でも、どうぞ三味線の音をねさしておくれ。お客様がお寂しげな、座敷が浮かぬ、お見やんせ、蠟燭ろうそくの灯も白けると、頼むようにして聞かいても、知らぬ、知らぬ、と言通す。三味線は和女、禁物か。下手や言うて、知らぬ云うて、まがり曲なりにもお座つき一つ弾けぬ芸妓げいこがどこにある。

よう、思うてもお見。平の座敷か、そでないか。あなた貴客がたのお人柄を見りや分るに、何で和女、勤める気や。私が済まぬ。さ、お立ち。ええ、私が箱を下げてやるから。」

と優しいのがツンと立って、襖ふすま際まぎわに横にした三味線を邪険に取って、衝つと縦たて様に引立てる。

「ああれ。」

はつと裳もすそを摺すらして、取とり縫すがるように、女中の膝せつを竊そつと抱かき、

袖そでを引き、三味線を引留めた。お三重の姿は崩くずれるごとく、芍しやく

薬やくの花の散るに似て、

「堪忍こらして下さいまし、堪忍こらして、堪忍こらして、」と、呼い吸きの切きれ  
る声こゑが湿うるんで、

「お客様にも、このお内へも、な、何で私が失礼しつれいしましょう。ほ  
んとに、あの、ほんとに三味線は出来できませんもの、姉さん、」

と言ことばが途絶とつえた。……

「今しがたも、な、他家よそのお座敷、隅の方に坐まっていました。不  
断つづではない、兵隊さんの送別会、大陽たいやう気に騒さわぐのに、芸げいのないも

のは置かん、衣服きものを脱いで踊るんなら可よし、可厭いやなら下げると……私一人帰されて、主人の家うちへ戻りますと、直ぐに酷ひどいめに逢いました、え。

三味線も弾けず、踊りも出来ぬ、座敷で衣物きものが脱げないなら、内で脱げ、引剥ひっぱぐと、な、帯も何も取られた上、台所で突伏つつぶせられて、引窓をわざと開けた、寒いお月様のさす影で、恥かしいなあ、柄杓ひしゃくで水を立続けて乳へも胸へもかけられましたの。

こちらから、あの、お座敷を掛けて下さいますと、どうでしょう、炬燵こたつで温めた襦袢じゆばんを着せて、東京のお客じゃそうなど、な、取って置ききの着物を出して、よう勤めて帰れや言うて、御主人が手で、駒下駄まで出すんです。

勤めるたつて、どうしましょう……踊は立つて歩行くことも出来ませんし、三味線は、それが姉さん、手を当てれば誰にだつて、音のせぬ事はないけれど、弾いて聞かせとおっしゃるもの、どうして私唄えます。……

<sup>かたわ</sup>不具でもないに<sup>なざけ</sup>情ない。調子が自分で出来ません。何をどうして、お座敷へ置いて頂けようと思ひますと、気が怯けて気が怯けて、口も満足利けませんから、何が気に入らないで、失礼な顔をする、お思い遊ばすのも無理はない、なあ。……

このお家へは、お台所で、洗い物のお手伝をいたします。姉さん、え、姉さん。」

と袖を擦つて、一生懸命、うるんだ目許を見得もなく、仰向け



になつて女中の顔。……色が見る見る柔いで、突いて立つた三味  
 線の棹さおも撓たわみそうになつた、と見ると、二人の客へ、向直つた、  
 ふつくりとある綾あやの帯の結むすびめ目で、なおその女中の袂たもとをおさせて。  
 ……

## 十六

お三重は、そして、更あらためて二箇ふたりの老人に手を支ついた。

「芸者でお呼び遊あそばした、と思おもいますと……お役に立たたず、極きまり  
 が悪わるうございまして、お銚ちようし子こを持もちますにも手が震ふるえてなりま  
 せん。下おさん婢めをお傍そばへお置おき遊あそばしたとお思おもいなさいまして、お休やす

みになりますまでお使いなすつて下さいまし。お背中を敲たたきまし  
 よう、な、どうぞな、お肩を揉もまして下さいまし。それなら一生  
 懸命にきつと精を出します。」

と惜おしげ気もなく、前髪を畳につくまで平伏ひれふした。三指づきの折か  
 がみが、こんな中でも、打上る。

本を開いて、道中の絵をじろじろと黙って見ていた捻平が、重  
 くるしい口を開けて、

「子孫末代よい意見じゃ、旅で芸者を呼ぶなぞは、のう、お互に  
 以後謹もう……」と火箸に手を置く。

所在なさそうに半眼で、正面まともに臨風榜可小楼りんふうぼうかしようろうを仰ぎながら、  
 程を忘れた巻まきたばこ 蓼ほこ、この時、口許へ火を吸つて、慌ぼうてて灰へ抛

つて、弥次郎兵衛は一つ咽むせた。

「ええ、いや、女中、……追つて祝儀はする。ここでも思うが、その娘こが気が詰つまろうから、どこか小座敷へ休まして皆みんなで饅頭でも食べてくれ。私が驕おごる。で、何か面白い話をして遊ばして、やがて可いい時分に帰すが可いい。」と冷くなつた猪口ちよこを取つて、寂しそ  
うに衝つと飲んだ。

女中は、これよりさき、支ついて突立つたつたその三味線を、次の室まの暗い方そつへ密おしと押遣やつて、がつくりと筋なが萎なえた風に、折重なるまで摺すり寄りながら、黙然だんまりで、燈ともの影かげに水のごとく打うち揺ゆぐ、お三重の背中さかを擦さつていた。

「島屋の亭が、そんな酷ひどい事をしおるかえ。可いいわ、内の御隠居

にそう言うて、沙汰をして上げよう。心安う思うておいで、ほんにまあ、よう和女あんた、顔へ疵きずもつけんの。」

と、かよわい腕かいなを撫な下ろす。

「ああ、それも売物じやいうだけの斟しん酌しゃくに違ちがいないな。……お客様に礼言れいごいや。さ、そして、何かを話しがてら、御隠居ごいんごの炬こ燵たつへおいで。切下髪きりさげがみに頭巾被ずきんかぶつて、ちようどな、羊羹ようかん切つて、茶を食べてや。

けども、」

とお三重みへの、その清らかな襟えり許もとから、優しい鬢びん毛のけを差さ覗しのぞくように、右瞻とみこうみ左瞻さみで、

「和女あんた、因果いんぐわやな、ほんとに、三味線さんまいせんは弾はけぬかい。ペンともシ

ヤンとも。」

で、わざと慰めるように吻ほほ々と笑った。

人の情なさけに溶けたと見える……氷る涙の玉を散らして、はっと泣いた声の下で、

「はい、願掛けをしましても、塩断ちまでしましたけれど、どうしても分りません、調子が一つ出来ません。性うまれつき来でござんしよう。」

師走やみよの闇夜しらうめに白梅おもてろうの、面を蠟ろうに照らされる。

「踊もかい。」

「は……い、」

「泣くな、弱虫、さあ一つ飲まんか！ 元氣をつけて。向後どこ

へか呼ばれた時は、怯おびえるなよ。氣の持ちようでどうにもなる。  
 ジャカジャカと引鳴らせ、糸瓜へちまの皮で搔廻すだ。琴ことも胡弓こきゆうも用  
 はない。銅鑼どら鑊よう鋌はちを叩けき。簫しょうの笛をピイと遣れ、上手下手は  
 誰にも分らぬ。それなら芸なしとは言われまい。踊が出来ずば体  
 操だ。一、

と左右へ、羽織の紐きの断きれるばかり大手を拵かげ、寛濶かんかつな胸を  
 反らすと、

「二よ。」と、庄屋殿が鉄砲二つ、ぬいと前へ突出いて、励ます  
 ごとく呵から々と弥次郎兵衛、

「これ、その位な事は出来よう。いや、それも度胸やっだな。見た処、  
 そのように氣が弱くては、いかな事も遣やっつけられまい、可哀相あはれに

。「と声が掠<sup>かす</sup>れる。

「あの……私が、自分から、言います事は出来ません、お恥<sup>はずか</sup>しいのでございますが、舞の真似<sup>まね</sup>が少しばかり立てますの、それもただ一ツだけ。」

と云う顔を俯向<sup>うつむ</sup>いて、恥かしそうにまた手を支<sup>つ</sup>く。

「舞えるかえ、舞えるのかえ。」

と女中は嬉しそうな声をして、

「おお、踊や言うで明かんのじゃ。舞えるのなら立っておくれ。

このお座敷、遠慮は入<sup>い</sup>らん。待ちなはれ、地が要ろう。これ喜野、あすこの広間へ行つてな、内の千がそう言うたて、誰でも弾けるのを借りて来やよ。」

とぼんとしていた小女の喜野が立とうとする、と、名告なのったお千が、打傾いて、優しく口許をちよいと曲げて傾いて、

「待って、待って、」

## 十七

「いつもと違う。……一度軍隊へ行きなされると、日曜でのうては出られぬ、……お国のためやで、馴なれぬ苦勞もしなさんす。新兵さんの送別会や。女衆が大勢居ても、一人抜けてもお座敷が寂しくなるもの。」

可いわ、旅の恥は掻棄てを反あべこべ対なが、一泊りのお客さんの前、



私が三味線を搔廻そう。お三重さん、立つのは何？ 有るものか、無いものか言うも行過ぎた……有るものとして無いけれど、どうか間に合わせたいものはある。」

「あら、姉さん。」

と、三味線取りに立とうとした、お千の膝を、袖でおさ圧えて、ちとはなじろんだ、お三重の愛嬌あいぎよう。

「糸に合うなら踊ります。あのな、私のはな、お能の舞の真似なんです。」と、言いも果てず、お千の膝に顔を隠して、小父者おじごと捻平そがいに背向そがいになった初々しき。包ましやかな姿ながら、身を揉もむ姿の着崩れして、袖を離れて畳に長い、襦袢の袖は媚なまめかしい。

「何、その舞を舞うのかい。」と弥次郎兵衛は一言云う。

捻平膝の本をばったり伏せて、

「さて、飲もう。手酌でよし。ここで舞などは願ひ下げじや。せめてお題目の太鼓にさっしやい。ふあはははは、」となぜか皺しわ枯がれた高笑い、この時ばかり天井に哄どっと響いた。

「捻平さん、捻さん。」

「おお。」

と不ふ性しょうげにやつと応こたえる。

「何も道中の話の種じや、ちよつと見物をしようと思ふね。」

「まず、ご免じや。」

「さらば、其そのもと許は目を瞑ねむるだ。」

「ええ、縁起の悪い事を言わさる。……明日にも江戸へ帰って、

可愛い孫娘の顔を見るまでは、死んでもなかなか目は瞑らぬ。」

「さてさて捻るわ、ソレそこが捻平さね。勝手になされ。さあ、

あの娘立ったり、この爺様に遠慮は入らぬぞ。それ、何にも芸がないと云うて肩腰をさすろうと卑下をする。どんな真似でも一つ遣れば、立派な芸者の面目が立つ。祝儀取るにも心持が可からうから、是非見たい。が、しかし心のままにしなよ、決して勤を強いるじやないぞ。」

「あんなに仰有って下さるもの。さあ、どんな事するのや知らんが、まずうても大事な、大事な、それ、支度は入らぬかい。」

「あい、」

とわずかに身を起すと、紫の襟を噛むように——ふつくりした  
 のが、あわれに窶れた——頤深く、恥かしそうに、内懐を覗  
 いたが、膚身に着けたと思わるる、……胸やや白き衣紋を透かし  
 て、濃い紫の細い包、袱紗の縮緬が翻然と翻ると、燭台に照つ  
 て、颯と輝く、銀の地の、ああ、白魚の指に重そうな、一本の  
 舞扇。

晃然とあるのを押頂くよう、前髪を掛けて、扇をその、玉  
 簪のごとく額に当てたを、そのまま折目高にきりきりと、月の  
 出汐の波の影、静に照々と開くとともに、顔を隠して、反らし  
 た指のみ、両方親骨にちらりと白い。

また川口の汐加減、隣の広間の人動揺めきが颯と退く。

と見れば皎然こうぜんたる銀の地に、黄金の雲を散らして、紺青こんじょう

の月、ただ一輪を描いたる、扇の影に声澄みて、

「——その時あま人申様もうすよう、もしこのたまを取得たらば、

この御子を世継の御位みくらいになしたまえと申しかば、子細しさいあら

じと領承したもう、さて我子ゆえに捨ん命、露ほども惜おしから

じと、千尋ちひろのなわを腰につけ、もしこの玉をとり得たらば、

このなわを動かすべし、その時人々ちからをそえ——」

と調子が緊しまつて、

「……ひきあげたまえと約束し、一の利剣を抜持つて、」

と扇をきりりと袖を直す、と手練てだれぞ見ゆる、自おのずから、衣紋の位

に年長たけて、瞳を定めたその顔かんばんせ。硝子戸がらす越に月さして、霜の川浪

照添てりそうおも倂かけ。膝立たてす据たえたす畳たたにも、燭しよく台だいの花はな颯さつと流ながるる。

「ああ、待まちてい。」

と捻平ねんぺい、力ちからの籠こもつた声こゑを掛かけた。

十八

で、火鉢ひばちをずつと傍そばへ引ひいて、

「女中にょちゆう、もちつとこれへ火ひをおくくれ。いや、立たつに及およばん。その、鉄瓶てつびんをはずせば可よし。」と捻平ねんぺいがいいつける。

この場合ばいなり、何なにとなく、お千ちも起居たちいに身み体たがしまつた。

静しずかに炭火すすかを移うつさせながら、捻平ねんぺいは膝ひざをずらすと、革鞆かばんなどは次

の室<sup>ま</sup>へ……それだけ床の間に差置いた……車の上でも頸<sup>うなじ</sup>に掛けた風呂敷包を、重いもののように両手<sup>やわら</sup>で柔かに取つて、膝の上へ据えながら、お千の顔を除<sup>よ</sup>けて、火鉢の上へ片手を裏表かざしつつ、「ああ、これ、お三重さんとか言うの、そのお娘<sup>こ</sup>、手を上げられい。さ、手を上げて、」

と言う。……お三重は利剣で立とうとしたのを、慌<sup>あわただ</sup>しく捻平に留められたので、この時まで、差開いたその舞扇が、唇の花に霞むまで、俯向<sup>うつむ</sup>いた顔をひたと額につけて、片手を畳に支<sup>つ</sup>いていた。こう捻平に声懸けられて、わずかに顔を振上げながら、きりきりと一ま<sup>ま</sup>ず閉じると、その扇を畳<sup>たたみ</sup>に連れて、今まで、潤<sup>かつ</sup>と瞳を張つて見据えていた眼<sup>まなこ</sup>を、次第<sup>ついで</sup>に塞<sup>ふさ</sup>いだ弥次郎兵衛は、ものも言わ

ず、火鉢のふちに、ぶるぶると震う指を、と支えた態なりの、巻まきたば

菘こから、音もしないで、ほろほろと灰がこぼれる。

捻平座蒲団さぶとんを一膝ひとひざ出て、

「いや、更あらためて、熟とくと、見せてもらおうじゃが、まずこつちへ寄らしやれ。ええ、今の謡うたいの、氣組みと、その形かた。教えも教えた、さて、習いも習うたの。」

こうまでこれを教うるものは、四国の果はてにも他ほかにはあるまい。あらかた人は分つたが、それとなく音信たよりも聞きたい。の、其許そこも黙もくつて聞かつしやい。」

と弥次が方かたに、捻平目遣めづかいを一つして、

「まず、どうして、誰から、御身おみは習うたの。」



「はい、」

と弱々と返事した。お三重はもう、他愛なく娘になつて、ほろりとして、

「あの、前刻も申しましたように、不器用も通越した、調子はずれ、その上覚えが悪うござんして、長唄の宵や待ちの三味線のテ  
ンもツンも分りません。この間まで居りました、山田の新町の姉  
さんが、朝と昼と、手隙な時は晩方も、日に三度ずつも、あの囁  
んで含めて、胸を割つて刻込むように教えて下さつたんでござい  
ますけれど、自分でも悲しい。……暁の、とだけ十日かかつて、  
やっと真似だけ弾けますと、夢になつてもう手が違い、心では思  
いながら、三の手が一へ滑つて、とぼけたような音がします。

撥ばちで咽喉のどを引裂かれ、煙管きせるで胸を打たれたのも、糸を切った数より多い。

それも何も、邪険でするのではないのです。……私が、な、まだその前に、鳥羽とばの廓くわに居ゐました時、……」

「ああ、お前さんは、鳥羽のものかい、志摩だな。」

と弥次郎兵衛がフト聞入れた。

「いえ、私はな、やつぱりお伊勢なんですけれど、父おとつさんが死なくなりましたから、継母まははに売られて行きましたの。はじめに聞いた奉公とは嘘のように違います。——お客の言うことを聞かぬ言うて、陸おかで悪くば海で稼げって、崖がけの下の船ふなつき着から、夜になると、男衆おとこに捉つかえられて、小船つかまに積まれて海へ出て、月があつても、

島の蔭の暗い処を、危いなあ、ひやひやする、木の葉のように浮いて歩ある行るいて、寂しんとした海の上で……悲しい唄を唄います。そしてお客の取れぬ時は、船頭衆の胸に響いて、女が恋しゆうなる禁ま厭じないじゃ、お茶ちやひ挽いた罰、と云つて、船から海へ、びしやびしやと追下ろして、汐しおの干た巖いわへ上げて、巖の裂目へ俯うつむ向けに口をつけさして、（こいし、こいし。）と呼ばせます。若い衆は舳へさきに待まちつて、声が切れると、榮螺さざえの殻をぴしぴしと打ぶ着つけますの。汐風が濡れて吹く、夏の夜でも寒いもの。……私のそれは、師走から、寒うちの中で、八百八島やしまあると言う、どの島も皆白い。霜風が凍りついた、巖の角は針のような、あの、その上で、（こいし、こいし。）って、唇の、しびれるばかり泣ないている。咽のど喉は裂け、

舌は凍つて、潮を浴びた裙すそから冷え通つて、正体がなくなる処を、  
 貝殻で引搔ひっかかれて、やつと船で正気が付くのは、灯あかりもない、何の  
 船やら、あの、まあ、鬼の支ついた棒見るような帆柱の下から、皮  
 の硬こわい大おおき手がおき出て、引ひ搦なんで抱か込みます。

空には蒼あおい星ばかり、海の水は皆黒い。暗やみの夜の血の池に落ち  
 たようで、ああ、生きているか……千鳥も鳴く、私も泣く。……  
 お恥かしゆうござんす。」

と翳かげす扇の利剣に添えて、水のような袖をあて、顔を隠したそ  
 の風情。人は声なくして、ただ、ちりちりと、蠟ろうそく燭なんだの涙白く散  
 る。

この物語を聞く人々、いかに日和山の頂より、志摩の島々、海

の風なぎ、霞の池に鶴の舞う、あの、麗朗うららかになる景色を見たるか。

## 十九

「泣いてばかりいますから、気の荒いお船頭が、こんな泣虫を買  
うほどなら、伊良子崎なまこの海鼠ふとんを蒲団で、弥島やしまの烏賊いかを遊ぶつて、  
どの船からも投出される。

また、あの巖いわに追上げられて、霜風の間々あいあいに、（こいし、こ  
いし。）と泣くのでござんす。

手足は凍つて貝になつても、（こいし）と泣くのが本望な。巖  
の裂目を沖へ通つて、海の果はてまで響いて欲しい。もう船も去いね、

潮も来い。……そのまままで石になつてしまいたいと思うほど、お客様、私は、あの、」  
と乱れた襦袢の袖を銜くわえた、水紅色映る瞼まぶたのあたり、ほんのりと薄くして、

「心でばかり長い事、思つておりまする人があつて。……芸も容きりりよう色もないものが、生意気を云うようですが、……たとい殺されても、死んでもと、心願掛けておりました。

ある晩も、やつぱり蒼あおい灯の船に買われて、その船頭衆の言う事を肯きかなかつたので、こつちの船へ突返されると、艫ともの処あに行あ火んかを跨またいで、どぶろくを飲んでいた、私を送りの若い衆しゅがな、玉ぎよくくだだいいだけ損をしやはれ、此方衆こなたしゅの見る前で、この女を、海士あま

にして慰もうと、月の良い晩でした。

胴の間で着物を脱がして、膚はだの紐へなわを付けて、倒さかさまに海の深みへ沈めます。ずんずんずんと沈んでな、もう奈落かと思う時、釣瓶つるべのようにきりきりと、身体からだを車に引上げて、髪しずくの雫も切らせずに、また海へ突つ込みました。

この時な、その繋かかり船に、長崎辺の伯父が一人乗込んでいると云うて、お小遣こづかいの無心に来て、泊込んでおりました、二見から鳥羽がよいの馬車に、馭ぎよ者しやをします、寒中、襦しや衣つ一枚に袴ずぼん服を穿はいた若い人が、私のそんなにされるのが、あんまり可哀相な、とそう云うて、伊勢へ帰つて、その話をしましたので、今、あの申しました。……

この間までおりました、古市の新地しんまちの姉さんが、随分なお金子かねを出して、私を連れ出してくれましたの。

それでな、鳥羽の鬼へも面つらあて当あてに、芸をよく覚えて、立派な芸子になれやツて、姉さんが、そうやって、目に涙を一杯ためて、ぴしぴし撥ばちで打ぶちながら、三味線を教えてくれるんですが、どうした因果か、ちつとも覚えられません。

人さしと、中指と、ちよつとの間を、一日に三度ずつ、一週間も鳴らしますから、近所隣も迷惑して、御飯もまずいと言うのですえ。

また月の良い晩でした。ああ、今の御主人が、親切せつせつなだけなお辛い。……何の、身体からだの切ない、苦しいだけは、生命いのちが絶えれば



それで済む。いつそまた鳥羽へ行つて、あの巖いわに掴つかまつて、（こいし、こいし、）と泣こうか知らぬ、膚の紐になわつけて、海へ入れられるが気安あやすいような、と島も海も目に見えて、ふらふらと月の中を、千鳥が、冥土めいどの使いに来て、連れて行かれそうに思いました。……格子前せきまへへ流しが来ました。

新町の月影に、露の垂りそうな、あの、ちらちら光る撥ばち音おとで、

……博多帯しめ、筑前絞ちくぜんしぼり——

と、何とも言えぬ好こい声こゑで。

（へい、不調法、お喧やかしゆう、）って、そのまま行ゆきそうにしたのです。

（ああ、身震みぶるがするほど上う手まい、あやかるように拜まいで来きな、

それ、お賽銭さいせんをあげる気で。）

と滝縞たきしまお召めしの半纏はんてん着て、灰に袖のつくほどに、しんみり聞いてやった姉さんが、長火鉢ながひばちの抽斗ひきだしからお宝を出して、キイト、あの縷子しゆすが鳴る、帯おびへ挿はさんだ懐紙ひねに捻ひねつて、私に持たせなすつたのを、盆に乗せて、戸を開けると、もう一二間けん行きなさいます。

二人の間にある月をな、影かげで繫つないで、ちやつと行つて、

（是喃こいし。）と呼んで、出した盆を、振向いてお取りでした。私や、思わずその手に縫すがつて、涙がひとりでに出来ましたえ。男で居ながら、こんなにも上手な方があるものを、切せめてその指一本でも、私の身体からだについたらばと、つい、おろおろと泣いたのです。

頬ほお被かむりをしていなすつた。あのその、私の手を取つたまま――

―黙って、少し脇の方へ退いた処で、（何を泣く、）って優しい声で、その門附が聞いてくれます。もう恥も何も忘れてな、その、あの、どうしても三味線の覚えられぬ事を話しました。」

## 二十

「よく聞いて、しばらく熟と顔を見ていなさいました。

（芸事の出来るように、神へ願がん懸がけをすると云って、夜の明けぬ内、外へ出る。鼓ヶ嶽の裾にある、雑樹林の中へ来い。三日とも思うけれど、主人には、七日と頼んで。すぐ、今夜の明方から。

……分ったか。若い女の途中が危あぶない、この入口まで来て待つてや

る、化ばかされると思ふな、夢ではない。……)

とお言いのなり、三味線を胸くつつに附着けて、フイと暗がりへ附着いて、黒堀いを去きなさいます。……

その事は言わぬけれど、明方の三時から、夜の白むまで垢離こり取つて、願懸けすると頼んだら、姉さんは、喜んで、承知してくれました。

殺されたら死ぬ気でな、——大恩のある御主人の、この格子戸も見納めか、と思ふようで、軒下へ出て振返つて、門かどを視ながめて、立っているとな。

(おいで、)

と云つて、突いきなり然、背後うしろから手を取りなすつた、門附のそのお

方。

私はな、よう覚悟はしていたが、天狗様に攫さらわれるかと思いましたが。

あとは夢やら現うつやら。明方内へ帰つてからも、その後は二日も三日もただ茫ぼうとしておりましたの。……鼓ヶ嶽の松風と、五十鈴川の流ながれの音と聞えます、雑木の森の暗い中で、その方に教わりました。……舞も、あの、さす手も、ひく手も、ただ背後うしろから背中を抱いて下さいますと、私の身体からだが、舞いました。それだけより存じません。

もつとも、私が、あの、鳥羽の海へ投入入れられた、その身の上も話しました。その方は不思議な事で、私とは敵かたきのような中だ事

も、いろいろ入組んではおりますけれど、鼓ヶ嶽の裾の話は、誰にも言うな、と口留めをされました。何んにも話がなりません。

五日目に、もう可いから、これを舞って座敷をせい。芸なし、とは言うまい、ツて、お記念かたみなり、しるしなりに、この舞扇を下さいました。」

と袖で胸へしつかと抱いて、ぶるぶると肩を震わした、後毛おくれげがはらりとなる。

捻平溜息ためいきをして領うなずき、

「いや、よく分った。教え方も、習い方も、話されずとよく分った。時に、山田に居て、どうじやな、その舞だけでは勤まらなんだか。」

「はい、はじめに謡うたいました時は、皆みんなが、わつと笑うやら、中には恐おそろい怖こわいと云う人もござんす。なぜ言いうと、五日ばかり、あの

私わたしがな、天狗様に誘いひ出された、と風説うわさしたのでござんすから。」

「は、いかにも師匠が魔までなくては、その立方は習しわれぬわ。むむ、で、何かの、伊勢にも謡うたうたうものの、五人七人はあろうと思おもうが、その連中には見みせなんだか。」

「ええ、物もの好ずきに試しすつて、呼よんだ方もありました、地をお謡うたいなさる方が、何じややら、ちつとも、ものにならぬと言いつて、すぐにお留やめなさいましたの。」

「ははあ、いや、その足拍子あしうを入れられては、やわな謡うたは断ちぎれて飛とぶじやよ。ははははは、唸うなる連中粉こ灰ばいじやて。かたがたこの

桑名へ、住替えとやらしたのかの。」

「狐狸や、いや、あの、吠ほえて飛ぶ処は、梟ふくろの憑物つきものがしよつた、と皆きちがい氣違いにしなさいます。姉さんも、手放すのは可哀相や言つて下さいましたけれど、……周囲まわりの人が承知しませず、……この桑名の島屋とは、行ゆきかいはせぬ遠い中でも、姉さんの縁続きでござんすから、預けるつもりで寄越よこされましたの。」

「おお、そこで、また辛い思おもいをさせられるか。まずまず、それは後でゆつくり聞こう。……そのお娘こ、私わしも同おんなじ一じや。天魔でなくて、若い女が、術わざをするわと、仰天したので、手を留めて済まなんだ。さあ、立直して舞うて下さい。大儀じやろうが一さし頼む。私わしも久ひさぶりしで可懐なつかしい、御身おんみの姿で、若師匠の御意を得よう



。レ

ことばうち  
 と言の中に、膝で解く、その風呂敷の中を見よ。土佐の hands が  
 画いたような、あかしらべ たつたがわ 紅い調は立田川、月の裏皮、表皮。玉の砧を、  
 打つや、うつつに、天人も聞けかしとて、雲井、と銘ある秘蔵の  
 塗ぬりどう 胴。老の手捌き美しく、錦に梭を、投ぐるよう、さらさらと  
 緒を緊めて、火鉢の火に高く翳す、と……呼吸をのんで驚いたよ  
 うに見ていたお千は、思わず、はつと両手を支いた。

芸の威厳は争われず、この捻平を誰とかする、七十八歳の翁、  
 辺見秀之進。近頃孫に代を譲つて、雪叟とて隠居した、小鼓取  
 つて、本朝無双の名人である。

いざや、小父者は能役者、当流第一の老手、恩地源三郎、すな

わちこれ。

この二人は、侯爵津の守が、参宮の、仮の館に催された、一調の番組を勤め済まして、あとを膝栗毛で帰る途中であつた。

二十一

さて、饅飩屋では門附の兄哥が語り次ぐ。

「いや、それから、いろいろ勿体つける所作があつて、やがて大坊主が謡出した。

聞くと、どうして、思ったより出来ている、按摩鍼の芸ではない。……戸外をどつどと吹く風の中へ、この声を打撒けたら、あ

のピイピイ笛ぐらいに纏まとまろうというもんです。成程、随分なにかま夥間なにかまには、此こいつ奴やつに（的等。）扱あつかいにされようというのが少くない。

が、私に取とつちや小しょう敵てきだった。けれども芸は大事です、侮あなどるまい、と氣を緊しめて、そこで、膝ひざを。」

と坐すわり直なおると、肩の按摩が上へ浮ういて、門附の衣紋えもんが緊しまる。

「……この膝ひざを丁ちやうと叩たたいて、黙もくつて二ツ三ツ拍子を取ると、この

拍子たが尋常ただんじゃない。……親おやなり師匠しせうの叔父おじきの膝ひざに、小兒こどもの

時ときから、抱かかかれて習まなつた相伝あいでだ。対手あいての節ふしの隙間ひまを切きつて、伸のびち

縮ぢぢみを緊しめつ、緩ゆるめつ、声こゑの重味おもを芻はねあ上げて、咽喉のどの呼吸こゝろを突つ

崩くづす。寸法すんぽうを知らず、間拍子まびしの分わらない、まんざらの素人すねりは、盲め

目聾くらつんぼで氣きにはしないが、ちと商売しょうばい人の端はくれで、いささか心得こころえ

のある対手あいてだと、トンと一つ打たれただけで、もう声が引掛ひっかつて、節ぶざまが不状けつまずに蹴躓けつまずく。三味線の間あいも同おんなじ一だ。どうです、意気なお方に釣合なわぬ……ン、と一ツ匆はねないと、野暮な矢の字が、とうふにかすがい、糠ぬかに釘でぐしやりとならあね。

さすがに心得のある奴だけ、商売人にぴたりと一ツ、拍子で声おつぶを押伏おつぶせられると、張った調子が直ぐにたるんだ。思えば余計な若気あやまちの過あやまち失、こつちは畜生の浅猿あさましさだが、対手あいては素人の悲しさだ。

あわれや宗山。見る内に、額あぶらにたらたらと衝つと汗を流し、死しにぞこ声を振絞えると、頤あごから胸あぶらへ膏あぶらを絞あぶらった……あのその大きな唇なまこが海鼠なまこを干したように乾いて来て、舌こわが硬こわって呼吸いきが発奮はずむ。わな

わなと震える手で、畳を掴むように、うたいながら猪口を拾おうとする処、ものの本をまだ一枚とうたわぬ前、ピシリとそこへ高拍子を打込んだのが、下腹へ響いて、ドン底から節が抜けたものらしい。

はつと火のような呼吸を吐く、トタンに真俯向けに突伏す時、長々と舌を吐いて、犬のように畳を嘗めた。

(先生、御病気か。)

つて私あ莞爾したんだ。

(是非聞きたい、平にどうか。宗山、この上に聳になつても、貴下のを一番、聞かずには死なれぬ。)

と拳を握つて、せいせい言つてる。

(按摩さん。)

と私は呼んで、

(尾上町の藤屋まで、どのくらい離れている。)

(何んで、)

と聞く。

(間によつては声が響く。内証で来たんだ。……藤屋には私の声  
が聞かしたくない、叔父が一人寝てござるんだ。勇士は霜の氣勢けはい  
を知るとき——たださえ目敏めざとい老とし人よりが、この風だから寝苦しが  
つて、フト起きてでもいるとならない、祝儀は置いた。帰るぜ。)

ト宗山が、凝じつと塞ふさいだ目を、ぐるぐると動かして、

(暫しばらく、今の拍子を打ちなされ……古市から尾上町まで声が聞え

ようか、と言いなされる、御大言、年のお少わかさ。まだ一ひと度も声は聞かず、顔はもとより見た事もなければ……当流の大師匠、恩地源三郎どの養子と聞く……同じ喜多八氏の外にはあるまい。さようでござろう、恩地、)

と私の名をちやんと言う。

ああ、酔った、

と杯をばたりと落した。

「饒舌しやべつて悪い私の名じゃない。叔父に済まない。二人とも、誰にも言うな。……」

と鷹揚おうようで、按摩と女房に目をあしらい。

「私は羽織の裾を払って、

(違ったような、当ったようだ、が、何しろ、東京の的等の一人だ。宗家の宗、本山の山、宗山か。若布わかめの附焼でも土産に持って、東海道を這はい上れ。恩地の台所から音信おとずれたら、叔父には内証で、居候の腕白こまが、独楽こまを廻す片手間に、この浦船でも教えてやろう。)

とずっと立つ。

## 二十二

「痘瘡あばたの中に白しろまなこ眼めを剥むいて、よたよたと立上つて、憤いきどおつた声ながら、



(可懐なつかしいわ、若旦那、盲人の悲しさ顔は見えぬ。触らせて下され、つかまらせて下され、一撫ひとなで、撫でさせて下され。)

と言う。

いや、撫られて堪たまりますか。

摺すりぬ抜けようとするんだがね、六畳の狭い座敷、盲目めくらでも自分の

家うちだ。

素早く、階はしごだん子段の降口を塞ふさいで、むずと、大手を拵たげたらう。

……影が天井へ懸かつて、充満いっぱいの黒坊主が、汗あせあぶら膏あぶらを流して撫

じようとすする。

いや、その嫉妬しつとしゆうぢやく執やく着やくの、険な不思議の形相が、今もつて忘

れられない。

(可厭だ、可厭だ、可厭だ。)と、こっちは夢中に出ようとする、よける、留める、行違うで、やわな、かぐら堂の二階中みしみしと鳴る。風は轟々と当る。ただ黒雲に捲かれたようで、可恐し  
 くなつた、すぢ凄さは凄し。

衝と、引潜つて、ドンと飛び摺りに、どどどと駈け下りると、  
 ね。

(袖や、止めませい。)

と宗山が二階で喚いた。しわがれごえ皺枯声が、風でぱつと耳に当たると、  
 三四人立騒ぐ女の中から、すつと美しく姿を抜いて、格子を開け  
 た門口で、しっかりと掴まる。吹きつけて揉む風で、颯と紅い棲  
 がから搦むように、私にすが縫つたのが、ゆいわた結綿の、その娘です。

背中を揉んでた、薄茶を出した、あの影法師の妾めかけだろう。

ものを言う清すずしい、張はりのある目を上から見込んで、構うものか、行きがけだ。

(可愛い人だな、おい、殺されても死んでも、人の玩弄物おもちゃにされるな。)

と言捨てに突放つっぱなす。

(あれ。)と云う声がうしろへ、ぱつと吹飛ばされる風に向つて、砂塵しやじんの中へ、や、躍込むようにして一散かに駈けて返つた。

後のちに知つた、が、妾じゃない。お袖と云うその可愛いのは、山の娘だったね。それを娘と知っていたら、いや、その時だつて気が付いたら、按摩が親の仇敵かたきでも、私わつしあ退治するんじゃないか。

んだ。」

と不意にがツくりと胸を折つて俯向くと、按摩の手が、肩をすべつて、ぬいと越す。……その袖の陰で、取るともなく、落した杯を探りながら、

「もしか、按摩が尋ねて来たら、堅く居らん、と言え、と宿のものへいっ吩咐けた。叔父のすやすやは、上首尾で、並べて取つた床の中へ、すつぽり入つて、引被ひっかぶつて、可心いい持に寝たんだが。

ああ、寝心の好いい思いをしたのは、その晩きりさ。

なぜツて、宗山がその夜うちの中に、私に辱はずかしめられたのを口惜くやしがつて、傲慢ごうまんな奴だけに、ぴしりと、もろい折方、憤死してしまつたんだ。七代まで流儀たに崇たる、と手探りでにじり書がきした遺書かきおき

を残してな。死んだのは鼓ヶ嶽の裾だった。あの広場の雑樹へ下つて、夜が明けて、ヤツと小止になつた風に、ふらふらとまだ動いていたとき。

こつちは何にも知らなからう、風は凪ぐ、天気は可。叔父は一段の上機嫌。……古市を立てて二見へ行つた。朝の中、朝日館と云うのへ入つて、いずれ泊る、……先へ鳥羽へ行つて、ゆつくりしよう、直ぐに車で、上の山から、日の出の下、二見の浦の上を通つて、日和山を棧敷に、山の上に、海を青、豊にして二人で半日。やがて朝日館へ帰る、……とどうだ。

旅籠の表は黒山の人ばかりで、内の廊下もごつた返す。大袈裟な事を言うんじゃない。伊勢から私たちに逢いに來たのだ。按摩

の変事と遺書かきおきとで、その日の内に国中へ知れ渡つた。別にその事について文句は申さぬ。芸事で宗山の留とどめを刺したほどの豪えらい方々、是非に一日、山田で謡うたいが聞かして欲しい、と羽織袴はおりはかま、フロツクで押寄せたろう。

いや、叔父が怒るまいか。日本一の不所存もの、恩地源三郎が申渡す、向後一切いつせつ、謡を口にするまかりなこと罷成らん。立たちどころ処こゝろに勘当だ。さて宗山とか云う盲人、己おのが不束ふつつかなを知つて屈死した心、かくのごときは芸の上の鬼神おにがみなれば、自分とむらいは、葬式おの送くりむかい迎むかひ、墓に謡を手向きよう、と人々と約束して、私はその場から追出された。

あとの事は何も知らず、その時から、津々浦々をさすらい歩ある行

く、門附の果敢はかない身の上。」

二十三

「名古屋の大須の観音の裏町で、これも浮世に別れたらしい、三味線一挺ちよう、古道具屋の店にあつたを工面くめんしたのがはじまりで、一銭二銭、三銭じや木賃で泊めぬ夜よも多し、日数をつもると野宿も半分、京大阪と経へめぐって、西は博多まで行つたつけ。

何んだか伊勢が氣になつて、妙に急いで、逆戻りにまた来た。

……

私が言つたただ一言ひとこと、（人のおもちやになるな。）と言つた

を、生命いのちがけで守っている。……可愛い娘に逢ったのが一生の思おもいで出だ。

どうなるものでもないんだから、早く影をくらしましたが、四日市で煩わづって、女房おかみさん。」

と呼びかけた。

「お前さんじゃないけれど、深切な人があつた。やっと足腰が立つたと思ひねえ。上方筋は何でもない、間違つて謡を聞いても、お百姓が、（風呂が沸いた）で竹法螺たけぼら吹くも同然だが、東あづまへ上つて、箱根の山のどてつばらへ手が掛かると、もう、な、江戸の鼓が響くから、どう我慢がなるものか！ うっかり謡をうたいそうで危あやくつてならないからね、今いま切ぎれは越せません。これから大泉おおいずみ



みはら  
原、員弁、阿下岐をかけて、大垣街道。岐阜へ出たら飛騨越で、  
ほつくく  
北国筋へも廻ろうかしら、と富田近所を三日稼いで、桑名へ来  
たのが昨日だった。

その今夜はどうだ。不思議な人を二人見て、遣切れなくなつて  
この家へ飛込んだ。が、流の笛が身体に刺る。いつもよりはなお  
激しい。そこへまた影を見た。美しい影も見れば、可恐しい影も  
見た。ここで按摩が殺す気だろう。構うもんか、勝手にしろ、似  
たものを引つけて、とそう覚悟して按摩さん、背中へ掴ってもら  
つたんだ。

が、筋を抜かれる、身を撈られる、私が五体は裂けるようだ。」  
とまた差俯向く肩を越して、按摩の手が、それも物に震えな

がら、はたはたと戦おののきながら、背中に獅しが噛んだ面の附つら着く……門  
 附あわせの袷あの褪あせた色は、膚はだうす薄な胸を透かして、動悸どうきが筋に映るよ  
 う、あわれ、博多の柳の姿に、土蜘蛛つちぐも一つ搦からみついたように凄すげく  
 見える。

「誰や！」

と、不意に吃びっくり驚したような女房の声、うしろ見られる神棚の  
 灯ともしも暗くなる端に、べろべろと紙が濡れて、門かどの腰障子に穴があ  
 いた。それを見咎みとがめて一つ喚わめく、とがたがたと、登あしおと音高く、駈か  
 け退のいたのは御亭どの。

いや、困った親仁おやしが、一人でない、薪まきぎ雑ざつ棒ぼう、棒ぼう千切ちぎれで、二  
 人ばかり、若いものを連れていた。

「御老体、」

雪叟が小鼓を緊めたのを見て……こう言つて、恩地源三郎が儼げん然として顧みて、

「破格のお附合おそれい、恐多おそれいな。」

と膝に扇を取つて会釈をする。

「相変らず未熟でござる。」

と雪叟が礼を返して、そのまま座を下へおりんとした。

「平に、それは。」

「いや、蒲団の上では、お流儀に失礼じゃ。」

「は、その娘この舞が、甥おいの奴おもの倂かけゆえに、遠慮した、では私も、」

と言つた時、左右へ、敷物を齊ひとしく匆はねた。

「嫁女、嫁女、」

と源三郎、二声呼んで、

「お三重さんか、私は嫁と思うぞ。喜多八の叔父源三郎じゃ、更あらためて一さし舞え。」

二人の名家が屹きつと居直る。

瞳の動かぬ気高い顔して、恍惚うっとりと見詰めながら、よろよると引退ひきさがる、と黒髪うつる藤紫、肩も腕かいなも嬌なよやか娜ながら、袖に構えた扇の利剣、霜夜に声も凜りんりん々と、

「……引上げたままと約束し、一つの利剣を抜持つて……」

肩あやに綾あやなす鼓の手影、雲井の胸に光さし、艶つやが添つって、名譽なごころが

籠めた心の花に、調の緒の色、颯と燃え、ヤオ、と一つ声がか懸る。

「あつ、」

とばかり、屹と見据えた——能楽界の鶴なりしを、雲隠れつ、と惜まれた——恩地喜多八、鮎鮎屋の床几から、衝と片足を土間に落して、

「雪叟が鼓を打つ！ 鼓を打つ！」と身を揉んだ、胸を切めて、慌しく取つて蔽うた、手拭に、かつと血を吐いたが、かなぐり棄てると、右手を掴んで、按摩の手をしつかと取った。

「崇らば、崇れ、さあ、按摩。湊屋の門まで来い。もう一度、若旦那が聞かしてやろう。」

と、引立てて、ずいと出た。

「（源三郎）……かくて竜宮に至りて宮中を見れば、その高さ三十丈の玉塔に、かの玉をこめ置おき、香花こうげを備え、守護神は八竜なみい並居たり、その外悪魚鰐わにの口、遁のがれがたしや我命わが、さすが恩愛の故郷ふるさとのかたぞ恋しき、あの浪のあなたにぞ……」

その時、漲みなぎる心の張はりに、島田の元結もとゆいふつつと切れ、肩に崩る緑の黒髪。水に乱れて、灯ゆらに揺めき、豊の海は裳もすそに澄ちりんで、塵ちりも留とどめぬ舞振まいぶりかな。

「（源三郎）……我子わがこは有あらん、父大臣もおわすらむ……」

と声が幽かすんで、源三郎の地謡じじう節が、フト途絶えようとした時であつた。

この湊屋の門口で、爽さわやかに調子を合あわした。……その声、白にじき虹

のごとく、衝と来て、お三重の姿に射した。

「（喜多八）……さるにてもこのままに別れ果はてなかなしきよと、涙ぐみて立ちしが……」

「やあ、大事な処、倒れるな。」

と源三郎すつと座を立ち、よろめく三重の背せなを支えた、老おいの腕かいなに女浪めなみの袖、この後見の大磐石に、みるの緑の黒髪かけて、颯さつと翳かざすや舞扇は、銀地に、その、雲も恋人の影も立添う、光を放つて、灯ともを白しめて舞うのである。

舞いも舞うた、謡いも謡う。はた雪叟おおかわが自得の秘曲に、桑名の海も、トトと大鼓おおかわの拍子を添え、川浪近くタタと鳴つて、太鼓の響ひびきに汀みぎわを打てば、多度山たどさんの霜の頂、月の御在所たけヶ嶽たけの影、鎌ヶ

嶽、冠かむりケ嶽も冠着て、客座に並ぶ氣勢けはいあり。

小夜更さよけぬ。町凍いてぬ。どことしもなく虚空おおぞらに笛の聞えた時、

恩地喜多八はただ一人、湊屋の軒の蔭に、姿蒼あおく、影を濃く立つ

て謡うと、月が棟高く廂ひさしを照らして、渠かれの面おもてに、扇のような光を

投げた。舞の扇と、うら表に、そこでぴたりと合うのである。

「（喜多八）……また思切つて手を合せ、南無なむや志渡寺しどじの観音

薩埵さつたの力をあわせてたびたまえとて、大悲の利剣を額にあて、

竜宮に飛び入れば、左右へはつとぞ退のいたりける、」

と謡い澄ましつつ、

「背せなを貸せ、宗山。」と言うとともに、恩地喜多八は疲れた状さまし

て、先刻さつきからその裾すそに、大きく何やら踞うずくまった、形のない、もの



の影を、腰掛くるよう、取つて引敷くがごとくにした。

路一筋白くして、掛行燈かけあんどんの更けたかなたこなた、杖を支ついた  
按摩も交つて、ちらちらと人立ちする。

明治四十三（一九一〇）年一月



# 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成6」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年3月21日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集」岩波書店

1942（昭和17）年7月刊行開始

※底本で句点が抜けている箇所は親本を参照して補いました。

※誤植を疑った箇所はちくま日本文学全集を参照しました。

入力：門田裕志

校正：砂場清隆

2002年1月9日公開

2005年9月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 歌行燈

## 泉鏡花

2020年 7月13日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>